溫故紀聞 卷下

天同藏書

037

5
17
1

長周叢書

温故私記　下

5
1

溫故私記卷第十二

輝元公尼子勝久退治として雲州御發向の事

元龜元年正月十六日尼子孫四郎勝久退治として輝元公十八歳の御時藝州吉田の陣を御出馬なされ雲州へ御發向なり御供には吉川元春公嫡子吉川元長公次男吉川又次郎經言公（後藏人改廣家）小早川隆景公中にも又次郎殿ととし十一歳若年なれとも御供達て御願ひ申へ召連られけり惣して御人數一萬三千也此度は分て御小勢なり其故は大友豐前へ働出の由風聞に付宗像氏貞高橋鑑種へ御加勢のため防長の御人數一人も召連られす又同州の武田高信事勝久へ一味して伯州へ打入のよし其聞えあれは南條小鴨北谷山田等一人も御供相成す又備後備中衆も備前の宇喜多を氣遣ひ隣國ともに一樣には治らされは是も御供相成すと也されは元龜元年二月八日輝元公隆景公

備へに一備へ押し

御同道の處以の外大雪にて漸く津賀へ御着陣なり元春公御父子三人は御先手もへ赤穴に御陣取なり然れは吉田にて元就公兩川殿へ宣ふは輝元惣大將にして出馬は此度初ての事なれは花々しく一戰あつて一手際あれかしとの御意によつて兩川殿も御心に掛られ敵を僞りおひき出し一勝負と思し召れ備へ陣取かた〳〵無勢なるやうに作せられ同九日には雲州多久和の城に福山三郎左衛門光定遠藤甚九郎河添右京亮人數五百餘にて籠り居れは是を御責取成るへしと御規定の處に敵方其夜城を明て退きけるを各聞付追懸て首七十餘級討捕けり梶原盛重の家中高橋右京亮、壇上監物、田原、安原なと功名せり福原貞俊一手の中にては南方宮内少輔就正井上民部少輔經貞秋廣の福原惣右衛門俊親末國與次元氏保垣の羽仁藤兵衛なと高名せり元春公の御家中には森脇市郎右衛門春方朝枝市之祐笠間刑部少輔に河内石見守香川兵部春景一番鎗と相聞えたり江村か家人には坂田彦六平賀家人には東村平内阿曾沼家人には井上元右衛門熊谷信直家人には水落隼人細迫彌三郎なと眞先に進て鎗を合せ高名せり然る處に御手本より粟屋右京亮元親木戸の桂善左衛門廣景兩人蒐出鎗を合せ比類なき手柄せりなを小早川殿一手宍戸殿一手其外國衆歴々掛合さるゝに依て尼子家の大將森脇東市正を始として宗徒の者とも足立になつて敗北せし所に同所牛尾の城に籠りたる立原源太兵衛横道兵庫三刀屋藏人此三將大勢にて蒐出働きけり輝元公御覽なされ爰にては前後の次弟も入らす只掛れ々々と計り仰捨られ御自分御馬を被入に依て福原志道両人も眞先に掛たり其時輝元公の左右に備たる粟屋掃部元好國司右京元武一同に突て掛りなを御手廻の若き者共も我劣らしと掛出目を驚かしたる働き

せり中にも岡又十郎元良坪井將監中村内藏允志道源三就良井上十郎左衞門なと手柄のほといふも更なりつきて岡元良は一日のうちに七たひ鎗を合せ敵數輩打取高名拔群なれは元就公輝元公御兩判の御感狀下され其上御腰物拜領猶鎧の袖に鈴を免され並錦印賜之誠武門の譽れ此上なし此合戰は輝元公御自身御働きもへ吉川殿小早川殿宍戸殿三家の儀は云に及はす國衆なとまても一命を顧みす火花を散して戰はれけるに依て尼子方河添右京福山次郎右衞門なと漸富部へ逃入けり山中鹿之助毛利家の人數はいかはとかと問けれは一萬とはいへとも一萬四五千はあるへしと答へけり各聞て臆病神か付て多勢とみえけるかと笑ひたるの由元春公内々此邊の土民等に金銀を取せ置れけるゆへ敵方の樣子節々告知せたり鹿之助は山々谷々に小屋を掛置勝久末次の土居に籠り居給ふも多勢のやうにしらせんとの手立なりと聞えけり

雲州富部合戰の事

一山中鹿之助立原源太兵衞談合して方々の城々に籠置ける人數を呼集め六千七百の着到にて富部表へ討て出中山に陣を取輝元公は三澤爲清か鎗倉山へ御陣を被替元龜元年二月十二日に比田に一夜御陣を成れける所に敵方富部に陣を取ける通聞し召れ翌十三日富部表へ御出張成れけり富部の小城には森脇東市正氏眞籠り居けるを可被攻崩との事なりしか夜中に城を明退尼子の陣へ掛込けり同十四日の曉より大雪いやか上に降積り敵の樣子知兼けれは木原次郎兵衞元定轉與三左衞門勝之を物見に遣されけり兩人歸り云けるは敵退散いたさゝれは此方の衆も出合て互に鐵砲せり合せり敵は五六千許待受たりと云けれは兩川殿仰には輝元公初て御出馬の事な

れは花々しく一戰すへしと元就公御意ありし通諸將へ仰聞られける處に輝元公御諚には軍を出さは唯今能時分たるへし敵方おもふ儘に粮を認めて後備を立待設せは切崩す事容易なるましはやく打て蒐れと宣ふ椙原播磨守盛重うけ玉はり今の御一言元就公におと らせ玉はぬ御大將と感して鎧も着す馬に打乘て眞先に掛る敵陣の山への道三筋あり本道は御本手衆福原桂志道口羽兒玉赤川以下四千餘人其次は小笠原平賀楢崎木梨なと也輝元公御旗本は三千七百餘騎にて後陣に備へられたり一の御先吉川殿三千五百餘其次椙原盛重其次宍戸熊谷なり雲伯石の小身衆は浮武者にて所の案内者なれは山々谷々へ忍ひ入合戰半に横鎗を入よと仰渡され同二月十四日未明に三口より敵陣の山へ攻上りけり吉川殿責口は水谷口也嫡子元長は二十四歳許の若大將なれは眞先に進み給ふ敵の先陣は森

脇東市正馬木與一郎米原中井二千餘人妻手の方に山中鹿之助立原源太兵衛一千五百人又力石黒政高尾五百餘にて後の峰に備を立たり東口御旗本の攻口へ向さる敵は牛尾彈正信久横道源助同弟權の允遠藤馬賀田一千餘騎二陣は横道兵庫助氏盛岸秋宅羽倉一千七百餘騎富部山道に備を立互に鐵砲せり合あり其後入亂れて相戰ふ處に尼子方横道權之允と味方の田門右衛門と渡り合權之允田門を討て首を取又横道源助か粟屋又右衛門元光鎗を合する處に源助終に又右衛門を討捕此勢に乘て尼子勢突て掛る味方突立られて山下まて引退く森脇東市正一千五百餘騎下合せ相戰ふ味方の勢元長公の御馬の前まて崩れかゝる元長公大に怒りて比興也旁々返して一戰せよと宣ひ自分五百餘の備を押立責らる元春公隆景公も敵に息なつかせそ平攻にせめ上れと聲を掛玉ふ隆景公の衆は谷へ廻りて攻

上る森脇東市正米原平内一度に崩れて引退く山中立原入替て防戰するに依て又森脇米原取て返して戰ふ是よりは入亂れて相戰ふ所に谷々の浮武者とも突てかゝる敵是を見て山佐口(ササグチ)へ崩れて退軍せり吉田衆も返し合せて牛尾等を追崩しけり御本手衆轉與三左衞門働きして米原新右衞門を討捕内藤彌左衞門は上田權八郎を討て高名す兒玉孫十郎並熊谷家中の細迫彌三郎は討死せり横道兵庫助氏盛をは中原善左衞門就久見知て討取けり馬木與市兄弟は吉川殿御内の江田七郎右衞門淺原助六兩人して討捕けり坂の上にて山中立原森脇取て返し戰ひけれとも元春公の御内境與三右衞門山縣惣右衞門境七郎右衞門一度に突て掛れは叶はすして退散し新山の勝久陣所へ蒐込けり富部の山路狹けれは毛利家へ討取首數漸く二百餘級なり此間に尼子方より隆重か籠りたる富部の城の通路を差留兵粮乏しく難儀しける處に此御合戰御勝利ゐへ天野隆重轉勝之兩人運を開き滿足せり其後印部と云所に一城を築れ番衆籠置れけり

牛尾彈正忠信久か居城三笠山落去の事

一元龜元年三月上旬に熊野の城へ御陣を寄られけり城主は熊野兵庫と云者なり此陣堅固の地にて容易に攻崩さるへしともみえす御評定の上山下悉く苗代返し仰付られ其後高津場と云大山の尾崎城山の尾首に付城仰付られたり同年四月十五日牛尾彈正信久か籠りたる三笠山の城を攻らるへしとて輝元公吉川殿小早川殿御陣を寄られ翌十六日より仕寄五ヶ所に仰付られける處に彈正忠御侘言いたせり其使往來の間に夜に入終夜互に鐵砲にて迫合夜を明しいよ〳〵降參致すへくの通御本陣へ窺ひける處に仕寄より城の堀際まて今田中務忠久香川民部春景黑杭惣右衞門足立彦左衞門寄掛塀の手へ

攻上り相働き手を負けり今日は敵合すましくの通仰出されける處に拔蒐謂さるとの御意にて元春公御目見もなされす然れ共元長公御内證にて各召出され能働きたりとて御感なされけりさて翌十七日諸手より五人十人あて塀の手に付城内を見込ける處に西の方にある小屋より不慮に出火にて燒上りけるゆへ諸勢みてひた〳〵と攻込けり井上肥後守俊友一番に本丸へ乘入たり（俊友か末は井上源兵衛俊重か家なり）續ひて内藤河内守元榮今田中務忠久香川兵部春景森脇采女なと云者我も〳〵と乘込何れも本丸にて牛尾か家人恩田主膳岩田權之允熊谷八彌と云者と相戰ひ手毎に分捕せり恩田をは内藤内藏助廣久（世に内藏允元幸と云誤也元幸は内藤作右衛門か家の元祖也内藏助廣久は内藤河内守元榮弟也本家下總守元泰抱置軍攻數度有之後爲三宮治左衛門廣尙一無譏て死す闕なく家斷絶せり）は内藏允元幸は内藤右衛門か家の元祖也内藏助廣久は内藤河内守元榮弟也本家下總守元泰抱置軍攻數度有之後爲三宮治左衛門廣尙一無譏て死す闕なく家斷絶せり）なり内藏助廣久は内藤河内守元榮弟也本家下總守元泰抱置軍攻數度有之後爲三宮治左衛門廣尙一無譏て死す闕なく家斷絶せり）討取けり御本手の兒玉兵庫景次と牛尾彈正信久と鎗を合せ互に手を負名乘あふて相引にせりさて彈正忠か弟隣西堂は此比東福寺に居けるか彈正籠城の由を聞て落城十日以前にくたり彈正同前に相働き是非なく兄弟一所にて討死せり討取頸數雜兵ともに三百餘級なり

雲州十藏の城へ働きの事

一元龜元年四月十八日十藏の城へ御陣替なり此城主最前は古志玄蕃允豊綱なり是も一廉よき山なれは毛利家より御持せなされ熊野の兩城へ取掛らるへくとの御僉議の處に井上肥後守俊友より熊野兵庫頭へ内通し熊野の城を明渡し兵庫頭降參せり夫より大津へ御陣替成れける處に米原平内廣綱か居城高瀨の城へ熊野兵庫頭も苦けり又大津より鳶か巢の城へ御陣替なされ高瀨の麓打廻り麥なき仰付られ隆景公退せらるゝの處に御退口へ城より下掛付送りけりは

牛一手
崎に

や日も暮れは輝元公より隆景公へ桂源右衛門元信を遣され敵いよ〳〵付なは其儘御陣を居られ然るへしさわらは輝元も參るへしとて狼の森と云所まて二十町許御越の處其間に付送る敵も引退けり此時は隆景公御内井上又右衛門春忠元清公御内桂内藏大夫其外人數二百許取て返し付ける敵を城中へ追込手負一人もなく御陣所まて御打入此所に五日御逗留なされ三里四方も麥薙仰付られ鳶か巣の御陣所へ御歸なされけり

雲州平田牛崎の城其外處々働の事

一元龜元年平田牛崎の城仰付られ牛尾大藏左衛門元貞岡又十郎元良其外番衆堅固に籠置れ夫より輝元公隆景公元清公御歸陣成れけり鳶か巣の城も御普請仰付られ志道大藏大輔元保桂源右衛門元保其外御人數籠置き夫より高瀨表へ御働成れ狼か森に御陣を居られ近邊の麥薙仰付られ元龜元年四月廿七日平田へ御打入なり然る處に尼子方より一千許にて牛崎の城へ押よせけり岡又十郎元良牛尾大藏左衛門元良兩人打て出防さけり猶杉原盛重加勢もへ敵叶はすして退散せり又佐田の勝間の城へ尼子勢八百許寄來りけり志道左馬助中村内藏大夫討て出一戰に及ひ大將三刀屋藏人德良を討捕けり其後も度々尼子衆働出るに依て勝間表の儀心許なく思し召れ元春公より森脇若狹守に人數二百許相添勝間表物見に差越れ益田衆も百許にて參りたり若狹守見宣て歸りける時尼子方森脇東市正平野善兵衛七百許にて追掛ける處に若狹守度々取て返し敵を追拂ひ味方を救ひけり

雲州高瀨の城へ入る兵粮船相支る事

一元龜元年米原平内廣綱居城高瀨も兵粮乏しく成けれは嶋根の新山

より萬願寺の城へ取付佐田郡より歴々人數を以て船にて高瀬の城へ兵粮を入けるゟへ押へとして御本手より岡又十郎元良吉川殿より吉川式部少輔經家を遣され則兵粮運送の船へ押掛舟番の者と合戦に及ひ敵船數艘打破り數十人討果し又十郎式部少輔手柄比類なし同年十月十四日高瀬より米原平内事平田牛崎の城へ働き塀際まて詰かける處に牛尾元貞岡元良其外城番の歴々突て出手を碎き防き戦ふによつて麓まて寄來る敵數多討取けり剰岡元良か倅はつきて働き米原又次郎を討捕て手柄せしに依て元良に對し元就公輝元公御兩判の御感狀下され今に岡吉左衞門か家にあり

雲州新山の城へ御働の事

一元龜元年尼子勝久の本陣新山の城へ元春公御働成れ五日御逗留あつて御退陣の處に城より多人數付送りけり此時も富田の城より天野隆重轉與三右衞門兩人討て出元春公御家中衆同前に切て蒐り新山勢を六十餘人討取けりかくて中途に一夜陣成れ平田へ御打入なり高瀬の城も一着すへきに付其旨吉田へ御注進有けれは元公就御滿悦淺からす天野隆重轉與三右衞門勝之兩人事富田以來打續き軍忠を盡すに依て隆重には雲州能美郡にて三千貫御加增御感狀に相添遣されけり轉勝之には雲州嶋根郡にて矢村隱州にて飯田郡引合千三百貫御加增御感狀にそへ遣されけり

輝元公藝州吉田へ御歸陣の事

一雲州の敵城大かた攻崩され又降參し今二三ヶ所抱りけれとも敵に勢ひもなきに依て元就公の御心添として輝元公隆景公元長公御同道にて元龜二年六月上旬平田を御出馬なされ吉田へ御歸陣也吉川元春公は六千餘の人數にて勝久押へとして雲州に御殘其年は神西

の小城にて御越年なり然れは雲州十藏の城主古志玄蕃允も去る永祿九年尼子義久沒落の時尼子家の諸士一同に雲州を立退き京都へ上るに付十藏の城には毛利家より坂式部少輔廣昌に同心數多付加へ籠置れ富田月山の城同前に仕置等仰付られける處に古志玄蕃事勝久の先手を乞請雲州へ亂れ入即時十藏の城を乘取て再ひ楯籠りけるに依て吉川殿より稠しく攻られけれは古志玄蕃一人切腹致すへくの間城中の者一命御助けあるやうにて御斷に依ていよ〳〵御念入られ城中より一人も出さるやうに手堅く圍ひ仰付られ則元就公へ吉川殿より御窺ひの處に元就公聞し召れ古志玄蕃事は先年尼子三兄弟富田籠城の時も無二の覺悟にて毛利家の者と毎々鎗を合せ手柄したる由相聞えけり且又尼子下城の節古志事は京都へ上り公方義輝公を賴み罷在の處に三好松永逆意の時も寄手を引請洛中にて軍忠を盡し名を顯したる者なれは向後元就に對し馳走致すへくとの儀納得にかゝるては助置るへくの由仰出れけるに依て其段吉川殿より仰渡されける處に古志謹て忝存し奉るの通御請し則下城致し御禮に罷出元春公御對面なされ其儘十藏の城へ籠置れ其後本領の地安堵仰付られたりさて又雲州羽倉の城には毛利家より長屋下野守元定を番頭として同心歷々差添られ其上鐵砲三十挺相添籠置れける處に山中鹿之助大勢にて寄掛攻けれは長屋は云に及はす同心の旁も一命を捨働く事比類なし中にも佐西の井上源左衞門小山の中島善左衞門鎗を合せ手柄せり寄手の內植田與三郎を長屋か手の者討取高名せり然れとも城中無勢にて防き兼けるやうに元春公聞し召れ後詰成るへくと有ける處に益田越中守藤兼我等先罷越へしとて一千餘騎を引卒して即時打立三刀屋久扶三澤爲虎も續ひ

て打立けれとも益田勢一番に駈付鹿之助か陣へ切てかゝる三刀屋三澤も相働き敵數多討取けり鹿之助堪兼て引退く偏に益田軍功に依て城中運をそ開きけるとなり

尼子勝久より末次の土居を攻らるゝ事

一此比尼子勝久家臣を集めて宣ふは毛利輝元小早川隆景藝州へ歸陣也當地には吉川元春一人殘り無勢なりと聞えけれは討果すへしと云れけれは各然るへしと同し元龜二年六月勝久四百餘の人數にて新山を打立同十日早天より末次の土居を攻られけり此城には毛利家より川口刑部少輔小鴨四郎三郎經基を籠置れ則此者とも身命を惜ます防き戰ふよし聞えけり後詰として元春公五百餘騎を率して打出られ椙原盛重三刀屋彈正久扶南條伯耆守元次三澤爲虎益田藤兼馳着都合五千餘騎其日の暮方に末次へ着陣す元春公宣ふは明日敵の退口を取切尼子方の根を斷へしと南條伯耆守山田出雲守一千餘にて敵の退口の道を取切へしと仰渡れけり然る處に勝久へ鹿之助諫め其夜新山を敗軍せられけり夫につき翌日新山の麓を燒拂ひ三日御在陣なれとも敵出合さるゆへ南條杉原に殿ひ仰付られ新山を引拂ひ高瀨へ御陣を寄られけり此城主は米原平内左衞門廣綱と云者にて一旦御味方に成又此度尼子方に成けるゆへ一人も殘らす討果さるへくとの儀にて既に明日と御規定の處に其夜高瀨の城を明て新山へ逃込けりかく高瀨も落城し其後鹿之助事人數七百許にて神西の城に在て近邊へ働きのよし注進あり元春公聞し召れ鹿之助を討果すへしとて御出馬の剋元春公風氣御煩にて延引せられけり

毛利元就公御逝去の事

一毛利元就公は元龜二年未の年六月十二日より御不例に在せられ御養生醫術を盡さるゝといへども其驗もあらす天の命數限りあれは佛神の加護にも及はす御齡ひ七十五歳にて同十四日の朝辰の刻藝州高田郡吉田庄郡山の御城におゐて御逝去成れけり輝元公小早川殿其外御息方御一門御家老中末々に至まて愁傷いわん方なく泣涙袂をそ浸しける去なから吉田に居合せたる旁は御末期の御介抱をもせられしか吉川殿宍戸殿口羽通良は雲州御在陣に依て御末期御見屆をもせられすいか斗りか殘り多からんされは御近習の人々歎き悲しむに甲斐なけれは其夜御遺骸を郡山の下(モト)大通院まて泣々送り出し奉り御沐浴をさせ備後の南禪寺笠雲禪師(惠心東堂の事後常榮寺の開山也)御袈裟衣を免し戒を授け玉ひて御法名を日賴洞春大居士と授號せられけり其時大庭加賀守賢兼と云し人久堅の晝夜となく仕へ奉り君恩の高き事は須彌の頂に越芳情の深き事蒼海の底にまされりとて御亡柄と同し形になり名を宗分と改め一首を御牌前に備へ奉る

墨染に今日なすまてもなき魂のひかりにもれぬ衣手の露

次の日頭をおろしぬると聞えて中の御局より元就公の着馴玉ひし夏衣を御形見にとて送り賜りし時

恩賜御衣今在此毎朝捧以拜餘香

と遊はされし玉作まて思ひ出られけれは

脫置し身を空蟬のから衣殘るかはりを形見とやせん

と詠しけり同廿日は一七日に當れり彼御寺の後の山にて朝の煙となり玉ふまて慕ひ見送りて

送りこし人はけふりとのぼる野のあとに殘りていつを待らん

此時日賴公に献し玉ふ笠雲和尚高作の偈

四海九州知有人人生七十五煙塵
分明淨智妙圓相突出虛空大日輪

かく賦せられし瑤韻に次て寺々の僧侶和せるれし其數を去らす又萬年和尚は博多聖福寺の高僧也（嚮岳鼎虎の事也聖福寺居間の額に萬年軒と有に依て世學て萬年と唱る也）聖福寺は佛心宗來朝初めて建立の寺なり萬年東福寺へ參り居られ夫より丹州氷上郡高源寺の住職也又建仁寺の十如院に居られ其三原の妙法寺へ入院いたされ元就公常々御歸依に付御逝去早速吉田へ參られけり日頼公御三年忌は天正元年に當る御法事は藝州多治比猿掛の御城下弘元公の御菩提所悅叟院にて御執行あり御三年忌まて彼御寺にて萬年和尚御燒香致されたり洞春寺は郡山に御建立三ヶ年に成就し萬年和尚を開山に仰付られ天正元年十二月十四日入院いたされけり

一元就公十一歳の御時井上河内守元兼か館へ客僧來り念佛の大事を授け大方樣にても御出一同に御傳授成れ一生御行ひ日光菩薩御信仰御相傳の內なり其時分より只今までは日待月待御懈怠なく日頼公と號けるも此ゆへのよしされは此客僧傳授終るとひとしく退さけるゆへ人をして差留に遣しけれとも其行衞をしらす奇特なる事と云傳えけり

一聖德太子佛法王法車の兩輪のとく廣め玉ふ所に日本は神國たるに詮なき事とて守屋の大臣逆意を企て聖德太子を討へしとて幾重ともなく圍みけれは遁れかたく思し召榎のうつほに隱れ玉ひ御運を開れけり推古天皇の御宇に守屋の大臣を御退治日本を治られし事其隱れなしされは太子榎のうつほにをはします時榎を以て製し給ふ毘沙門の像いかにして御手に入けるや元就公御所持なされけり

御逝去の後いつれへ籠られけるや其故しらとす也

一雲州御陣に御出馬の朝御具足櫃の上に錦の袋に入たる一卷の書夜の間に出來れり則手水鵜飼を成れ御拜見あれは軍法の秘書異言等數ヶ條あり常は恐れて容易に御拜見もなくたかし最初二三ヶ條を平人にも御讀せなされ奥をはあけさるやうに御認め置せられけは是又御身後しれすとなり

一歌道立花盤上亂舞等の達者諸方より參りけれは夫々相當に御あいしらひ一藝仰付られけりされとも稽古なとに御泥みもあらす御用の節は折々召出されたり御一味中其外弓箭の御相手衆なとへは内々此類の小藝貪着なきやうに御下知の由されは御自輸の御内書のうちに藝も入す能も入す遊も入す慰も入す何もかも入す只日夜ともに武略調略の工夫肝要なりと遊はしたる由なり

一高倉殿の御舍弟兵庫頭殿と云公家衆を仰請られ藝州吉田郡山に住居なり折々講釋を聞し召れ聖賢の道を尊み玉ふされは仰出さるゝほとの事經書の敎へに叶ひ近き者悅ふ則は遠き者來ると云てとく御分國の者は素より他の國の者までも靡き隨へりされは近習の者への御愛憐は勿論遠境の者も折々御對面あつて夫々の御意を加へられ山林海濱の者に應して方角〳〵の事とも御尋あれは御意の有かたさに仰を盡して御請いたしけりさるに依て自他國の事よく聞し召れ誠に歌人居なから名所を知に似たり又言は心の使にて人の心中の善惡賢不肖剛臆利鈍遲速直不直まて一合察とて一言を其者の心中と一わせに夫々の智分に合せて用ひられけるもへ仰出されけるはとの事成就せすといふ事なきに依て御弓箭のはか行けるとなり

一兵書など兼て御明らめともみえされとも其御武略全以て七書の旨に聊違はさるの由諸法は心か所作といふとく日夜の御工夫油斷なきもへ一心の御悟り開けて暗き事なし或は生れなからにして之をしり或は學て之をしり或は困(クルシン)て知之其知に及んでは一也と云とく其生れなからにしてしろし召事更に凡慮の外なるへし

一此比までは國々一統せす私に取合手柄次第のやうなりけれは他國へ御調略に遣されける者そこ〳〵にて仕損して囚はれ稍々綱ぬけなとして一命を助り思ひけるは世渡りの業多きうち奉公ほと難儀なる事はなし歸りなは御理いたし所帶を他人に讓るへしと存し極め歸りしか出仕の上御對面遊はされ先かたの樣子を聞し召れ御落涙にて種々有難き御意を加へられ御盃など遣されけれはしみ〳〵御恩のほとを感し古歌に幾たひかおもひ定めてかわるらん賴むましきは心なりけりと詠せしてとく移りやすき人心なれは又明日にても御用あらは何方へ成とも參へしとおもふやうに懷け玉ふとそ聞えける

一其家の繁昌すへき時は形に影のそふとく强將の下に弱兵なしといふも理りなり或時元就公御談合衆の內兒玉三郎右衞門就忠を召出され諸境目の國衆へ久しく御無音なれは急度御使者遣され度彼地に何そ珍らしき物を用意致さすへしと仰られけれは就忠御請に是は頓に御使者遣さるへくの處に御延引なれは是より申上へしと存し彼境に稀なる進物兩三種とて用意し置ける間早々御書御整仰付られけるやうにと云けれは其家〳〵相應の御使から仰付られ先樣別て御心入を添存しけるによつて自然其方角へ御人數出さるゝ時は我かちにと御馳走を致し夫もへ諸人心安く國々へ通路をせり古

文に曰萬國の歡心を得て先王に事るといふに叶へり

一諸藝に御心をよせられすといへとも折々御綴りありし御詠歌御發句御連歌なとを聖護院殿吉田にて御覽あり何れも淺からぬ御作意と稱美せられ京都へ御隨身にて御上り三條西殿並連歌の宗匠紹巴なとへ披見に入られ批判を御請の處にそれ〳〵御褒美の御書入奇特なる由御奥書ありて差下されたり其内花の題の御歌

今日の日も吉さは暮よ暮てこそまくらもからめ花の下かけ

と遊はれ御隙なき内にも花を御賞翫の御心はへ淺からす又或時春の山路を御通りありし時峠も尾も花の咲亂れたるを御覽して御發句

うらむなよこゝろにもるゝはなもなし

と遊はされたる御そこ意は御傍近く召仕るゝものは素より御憐愍の御心をくみしれり邊土遠境の者とても恩澤の遍きはもらさぬとの思し召也古語に潤ひ昆虫に及はすといへるとく誠に御仁心深き德風に靡かぬ草木もなく又御詠歌の内に

青柳の糸くり出す其かみはたかゐた卷のはしめなるらん

と遊はされ西殿も一入御褒美の御詞加へられたり禪法も惠心東堂の御弟子にて折ふしは法をも聞し召れたるのよし此御詠歌もだつの悟の御心もあるにや一花開くれは天下の春といふとく言句の及ふ所にあらす此外數多有へきなれとも傳へ聞しはかりを記せり

吉川元春公伯州御發向の事

一吉川元春公は元就公の御逝去を聞し召れ御愁歎いふはかりなし御燒香のため吉田へ御飯成れ度思召れけれとも伯州の經悟院事勝久へ内通せしに依て元春公各を召集られ仰られけるは元就公御他界

の事は歎きても詮なし一七日の追善に伯州へ打て出經悟院を討果すへし元就公への志これあらは一手際して玉はれかしと有ければ各一同に御尤千萬なりと御請いたしけりよつて元龜二年六月廿日三澤三郎左衛門爲虎三刀屋彈正左衛門久扶杉原彌八郎元盛南條伯耆守元次を初として雲伯の勢殘りなく其外宍戸殿熊谷佐波口羽都合六千餘騎高瀬を出馬し玉へり山中鹿之助事元春公雲州へ出馬に於ては人數を集め經悟院と云合せ一戰すへしとおもひ伯州の末石といふ小城海端に在り是へ罷出たり其たん元春公聞し召れ幸の事鹿之助をさへ討取なは雲伯の御隙明へしとて經悟院をさしをかれ大山へ御取掛と披露して末石へ寄掛られ城の廻りに柵を付柵際へ諸勢詰寄たりされとも城の土手高きゆへ勢樓を組上鐵砲を打込けれは鹿之助も堪かたく御侘言いたし御家人に成下されなは新山への御先手をして勝久を討果し其上伯州への御先をも致すへくの通宍戸殿口羽通良を憑みけり元春公は先城を請取其上にて鹿之助か首を刎らるへくの通仰られけれとも隆家通良両人達て御理いたし御弓矢のはか行けるやうに仰付られ然るへし備前の浦上並宇喜多事勝久へ内通して經悟院へ元春働きあらは人數五千にて加勢いたすへしと云ける由紛れなし元就公御逝去と云旁はやく御隙明けるやうにと云れける故先兩人へ鹿之助を預置るへしとて鹿之助下城せり其後兩人取持を以て鹿之助事輝元公の御被官に成れ防州德地にて千貫伯州にて千貫合せて二千貫の地充行はれなを元春公へ鹿之助御目見いたし尾高に宿所仰付置れけり

山中鹿之助幸盛欠落の事

一此比杉原盛重は病氣にて末石へ御供相成すされは鹿之助事詫言に

よつて助置るゝの由承り渠か欠落計りかたしとて葛松三柳二人を付置ける處に鹿之助より勝久への飛脚をとらへ穿鑿しければ鹿之助書狀あり其文に曰末石難儀に及ふゆへ一先降參いたせりとかくは欠落いたすへくの間御待成るへし新山に御座ある事成せられすは隱州へ御退きあるへし時節を以て切返し申へしとの文言なり其書狀を元春公へ盛重より送りければ元春公御覽の上隆家通良へ見せられければ兩人ともに是は盛重の分別達の似せ狀たるへしとて笑はれけりさて鹿之助は密に己か股をさし血を出し痢病煩ひけるよし僞りて晝夜數十度厠に通ひけり番の者とも初めは念を入れけるとも後には草臥眠りけれは其隙に厠の樋をくゝりて欠落し大山の麓を通り作州へ逃行けるゆへ右の飛脚に書狀をもたせ隆家通良方へ元春公より遣されければ兩人の衆更にとかふもなく誤り入てそ居られける夫より飛脚の者を又盛重へ遣されける處に盛重より飛脚の者に路料を取せ追捨られたり

尼子勝久雲州退散の事

一吉川元春公は宍戸隆家口羽通良杉原盛重南條入道元次三刀屋久扶三澤爲虎を先陣として七千餘にて新山の城へ押寄られければ勝久叶はす元龜二年八月廿五日新山を落て簾ヶ岳と云所へ退かれたり元春公續ひて追掛玉ふに付香賀の葛島(カツラ)へ舟にて退(ノカ)れけり兒玉内藏大夫就英數艘の船にて追かくる夫より隱岐の國へ渡り隱州より又上方へ上られけりかく成行けるに依て雲伯隱州因幡まて毛利家に屬しけり

公方義昭公備後の鞆へ御下向の事

一公方義昭公最前は奈良の一乘院におはしましけるを御舍兄義輝公

滅亡の後織田信長御敵を退治し義昭公を公方に備へられける處に其後義昭公と信長と不和に成玉ひ剩信長を討果さるへしとの御企を信長聞玉ひ天正元年三月信長大軍を引卒し上京の所に義昭公御侘言に付分別致され同年四月に岐阜へ歸陣せられけり又同年七月に義昭公御謀叛にて宇治の槇の島へ楯籠り玉ふ信長此樣子を聞て大軍を卒ひ宇治川を渡し槇の島へ攻破られける處に義昭公普賢寺へ退き玉ひ夫より同年七月十六日河内國若江の城へ御退出其所にて御法躰あり昌山公といふ其後紀州宮崎に御逗留なれとも賴るゝ方もなけれは一色式部大輔飯田肥後守等御供にて御船にめされ播州へ御越宇喜多直家を御賴みなれとも領掌いたさす夫より備後の鞆へ御下り毛利家を御憑み成れける故輝光公吉川殿小早川殿其外御一門御家老中悉召出され御請の事御談合の處に各申上られける

雲一に盛　廣景一に元將

は御領掌の時は信長とは御手切に極りさあらは向後の儀はいかゝあるへくやとありけれは又御意に公方御沒落にて無據御憑みを請されは世上の唱べもよからす弓矢の疵にも成へくの間御請致すへくの通にて御領掌仰上られけり其後鞆より一里はと後ろに山田と云在所あり則此所に横山修理と云地侍の屋敷を召上られ御所の御普請仰付られ御移りあり桂左衞門大夫元重同州の神邊に在城せは都合を御預け成れたりされとも其後毛利家も秀吉と御和平になり義昭公の念願も叶はす御上京にて室町に御住宅なりされとも御在京諸事の御造作御普請なとも大半毛利家より仰付進られけり此御所にて御歳六十一にて薨去なり雲陽院殿といふ尊氏公の御血脉此御方にて斷絶せり

木戸の桂善左衞門廣景手柄の事

一天正元年備中の國の三村修理元親より桂善左衛門に對し軍用すへき事あれは參るへしと也此旨輝元公へ達し則三村所へ參り歸るさ同州新見の通路神代舞尾（カウシロマイヲ）におゐて吉田與次郎と云者大將にて一揆の輩百六十人二手にわけ待伏せり善左衛門是を悟りて馬よりおり立けれは案のとく一手は山上一手は山下より伏を發し鬨の聲を合て善左衛門を取籠討取んと競ひ蒐りて來れり善左衛門か手の者十二三人三村よりの送りの者五六人都合十七八人には過す兵具は弓一張鐵砲一挺鎗一本也大將與次郎進出て云やう善左衛門殿は承り及ひたる弓取なり去なから此場は迯も遁れぬ所尋常に腹召れよとてそ匂りけれは善左衛門も覺悟して腹をや切ん敵の中へ蒐入て討死をやせんと思ひしかとも彼等式と徒らに討死すへき事口惜き次第也と思ひかへ鐵砲を取てみれは火繩もえ入て急のまに合す此方彼方空だめして敵をあさむけは恐れてさのみ進み得す其隙に火繩を解かへて待懸ける所に大將と思しき者二人左右を下知して進みくるを靜にためて打掛けれはあやまたす二人の大將を打て一同に倒れ伏たりさと寄て一人の首を取後に聞は吉田與次郎也今一人は雜兵肩に引懸退けり敵方よりも鐵砲二つ三つ放ち掛たりけれとも あたらす矢は數多あたりしかも其善左衛門か着したる茜の單衣の左右の袖に幾筋となく射付しをかなくり捨て働き數人討捨にし此外たん〳〵手を負せ一揆とも追散し終に運を開きけり吉田與次郎か首をは三村所へ送り遣せり依て天正元年五月廿七日三村修理進元親より善左衛門手柄無比類の由褒美の禮狀あり同日家臣三浦孫兵衛親成よりも其手柄を感し善左衛門に對し書翰あり其外右の赴藝州吉田へ歸りて申上けれは輝元公聞し召れ御感悅淺からす天正

元年六月二日御感狀遣されけり同年六月廿一日三村修理進元親より桂善左衞門所へ使節を以て手柄の一禮申越太刀一腰黃糸の腹當一領差越其時の書翰今にあり同年十二月廿四日其賞として備中の國の中知屋、花見にて御加增下され御打渡し輝元公の御證判也何れも桂善左衞門將次か家に持傳えたり

備中の三村元親宇喜多直家取合の事

一三村修理進元親の父三村家親事は先年雲州の尼子籠城の時毛利家より作州に置せられ上方筋の通路を留め忠儀を遂たる者也內々宇喜多と中あしく三村家親を亡さんと宇喜多策を廻りし我家臣遠藤と云者を近付今より其方を勘當すへし牢々の身と成て三村を賴み奉公いたし折を得て討果し歸りなは取立遣すへしと云遠藤領掌して其儘立除其後三村の家に奉公す或時家親所へ客ありて夜中に燈を挑けて酒宴あり遠藤よき折なりと思ひ定め座舗近くの椽の下に忍ひ入鐵砲に二つ玉をこめ心靜かにねらひて放ては誤たす家親か胸を打貫ぬく家の子歷々仰天し先家親を看病して騷くうち遠藤掛ぬけ宇喜多か家に歸る宇喜多褒美して取立同名にして宇喜多河內守直續と云後には十藏の城を預け置たり又備中才田の城是も三村か特分なりよつて宇喜多直家より取蒐る庄の又六元祐後詰として出張す元祐は三村元親の兄たるに依て也則一戰に及ひけるか宇喜多方勝利を得て三村勢敗軍す元祐は武勇なるにより大働きして戰死すされは家親か子に元親實親兩人あり此者ともより天正元年吉川殿を賴み輝元公へ云入けるは亡父家親事先年作州にありて忠節を盡せり今度宇喜多家にはかられ闇々と父を討せ無念至極なりしかしわれは兩人にては直家を討果さん事叶ひかたく何とそ御助勢

を以て宇喜多を亡し生前の欝憤を散し度なりさあらは兄弟ともにゆく〳〵御味方いたし忠烈を盡すへくの通り相歎きけり此段宇喜多承り安國寺を憑み小早川殿へ云入けるは備中の三村一族を某に仰付られなは早速討果し備中一國を毛利家へ差上へし御心許なく思し召れなは御望次第人質進上致すへくの通なり隆景公御請口の儀ゆへ輝元公へ仰上られけるは宇喜多三村今取合半なり頃日豫州への御加勢豊筑の御働き彼是差つとひたる事なれは宇喜多へ御加勢然るへし宇喜多を御退治成れなは御手間掛るへしとなり元春公は三村か方尤と聞し召れ其段輝元公へ仰上られけり輝元公仰に三村事先年忠義をも盡しける間是を救はれ度のたん隆景公へ仰談られ御極め成るへくとの事なりける處に其赴を安國寺承り宇喜多を御引立られ御弓矢のはか行けるやうにと存し重て輝元公へ云けるは三村元親は阿波の三好左京大夫義繼か幕下になり三好威勢を以て藝州へ敵對すへき内存のよし慥に承りたる通輝元公聞し召れ然るにおゐては詮方なく三村を討果さるへしとて三村元親か持分備後の國吉と云城へ天正元年十一月廿七日に押寄稠しく攻られける處に同晦日の夜に入城主矢野右京上下二十人許備中の松山へ落行けり國吉の城の物振を仕寄の者とも聞付其儘取上り殘る者ともを討果す右京か内に法行六郎左衛門と云侍長井右衛門大夫元則と鎗を合せ長井鎗下にて法行討れけり長井も二ヶ所手を負たり城中の人數四五十人ありしを轉與三左衛勝之飛落組の者鐵炮を以て打拂ひけり内藤彌左衛門糸永市助等敵を討取高名せり詰の丸に矢野右京か甥其外二三人能てたへ働く所へ木原次郎兵衛元定掛りて右京か甥を打取殘る二人をは粟屋源二郎と同朋の角阿彌討捕けり

溫故私記卷第十三

尼子孫四郎勝久因州處々働の事

一天正元年十二月尼子勝久を大將にて山中鹿之助幸盛立原源太兵衛久綱其外歴々付隨ひ但州へ下り因幡へ働へきとの催しせり山名大藏大夫豐國を頼み因州へ打越伯州を切取雲州へ打入へくと企て天正二年正月に先因州へ打入毛利家一味の衆抱の城三ヶ所責落し同年の春同州私部の城へ押寄ける所に城主大坪甚兵衛は藝州へ參りける留守にて家老姫路玄蕃牛尾大藏左衞門元貞一命を捨防戰せしかは寄手も攻屈し退散せり同年九月廿二日山中立原其外三千五百の人數にて毛利入道淨意か籠り居ける同州鳥執の城へ押蒐たり城兵三百餘人切て出防戰しけれとも叶ひかたく扱にいたし城を明渡しけれは則勝久入替り在城しける處に山名豐國方より使を以て云

けるは鳥執の城は元來某抱の端城なれは此方へ御渡有へしさなけれは我等事毛利家へ一和して一戰すへしと也勝久聞れ此節の儀なれは豐國望みに任すへきとて則本丸を豐國に渡し勝久は二の曲輪に居られけり其後大坪甚兵衞諫けるはとかく毛利家へ御一味然るへしと再三云けれとも承引せさるに依て我等は毛利家へ參るへしといひて藝州へ下りけりされは豐國立腹して甚兵衞か子とも兩人人質として渡し置けるを懲しめのため鳥執の山下にて張付に掛たり

尼子勝久因州鳥執の城を明退るゝ事

一天正二年大坪甚兵衞事藝州へ下り因州表の樣子委しく云けれは吉川元春公彼地へ御出馬有へし其内因州荒神山の城を乘取へきの旨南條伯耆守元次杉原播磨守盛重山内出雲守重正方へ仰遣され即時荒神山の城乘崩しけりされは山名豐國事家臣森下出羽守通興中村對馬守春次を呼て毛利家に背きし事いかゝ有へしやと談合しけれは大坪も此儀をこそ再三諫めけれ早々毛利家へ御一味然るへし去なから驗しなくては疑ひ有へしよつて鳥越の城を一圓御攻取是を毛利家への御土產に然るへしと云もへさらはとて勝久へ手切の色をみせけれは勝久おとろき山名心替りの上は當城に住居成ましとて大坪か明退たる私部の城を拵へ歷々人數を籠置勝久は山中鹿之助幸盛立原源太兵衞久綱神西三郎左衞門通兼加藤彥四郎經盛等を召運因州若櫻（ワカサ）の鬼か城へ籠られける處に山名豐國より使者を以て元春公へ申越けるは尼子勝久當國へ下向の處存の外大勢にて參小勢なれは防戰なしかたし我等一旦勝久に屬しけれとも時節を窺ひ此度鳥執の城に押懸勝久を押出したり猶御加勢差越れなは私部鬼

か城を乗取へくの由なりよつて牛尾大藏左衛門元貞事因州の案内者なれは二百餘の人數を添られ因州へ遣されたり牛尾早速若櫻の鬼か城へ着いたし山下に一宿せし處に鹿之助此樣子を聞付五百餘の人數にて夜討を懸たり五月七日の夜なれは目さすとも知ぬほとの闇に牛尾元貞能働き鹿之助を追はらひ運を開きけり

鬼の身の城主上野近江入道親行か事

一天正三年正月二日輝元公備中の成羽へ御陣替成れ夫より外郡へ御出張あつて鬼の身の城に上野近江入道親行同養子孫四郎實親住するに依て御取詰の處に入道我一命を助らんとて毛利家へ侘言いたし下城して城を渡せり此事を養子實親にも談合せす剰實親に腹を切せんとす實親は養子と云然も孫婿也入道人外の働きなるゆへ是を聞て實親は備中楪（ユツハ）の城へ落行けり入道をは約束の如く阿州へ送り遣されけり同三日鬼の身より二里程艮に當りて手の城と云あり鬼の身まて近く隙を寄られける處に毛利家の若き衆云合せ人數三百ほとにて手の城山へ押寄其勢二手にわけ西の尾首へ百六七十人取上り東の麓の小屋へ百二三十人よせ蒐双方互に鐵炮にて戰ひけり尾頭にて小屋口にも手負七八人充あり其内に毛利家の羽仁又右衛門事小屋口にて深手を負當座に果たり勿論敵方にも手負數多あり小屋をは燒崩すへく云ける處に御本陣より使にて淺はかなる働き無用なり早々罷退へくの通仰越れけれは則兩口ともに引退きけり

手の城主明退事付友野石見守返忠の事

一天正三年正月二日鬼の身落城の翌日いよ〳〵手の城を取詰らるへくとの御規定なりける處に其夜三村越中守比那因幡守兩人城を明

退けり其比輝元公は御不例ゆへ御歸陣成れけりよつて福原左近貞俊口羽刑部通良兩人を隆景公の御供仰付られ備中の松山表へ御陣替なされ松山隣郷の麥薙仰付られたり其間に桑山の城主石川源左衞門尉久孝城を明て阿州へ落んと志せとも退きかね家賴の友野石見守に談しけれは先我宿へ請し忽返忠し隆景公へ内通せしゆへ人數を差越れ久孝を討果し其首を備中小田の御本陣へ持せられたり同州新見杜の城に在ける元親の弟實親是も又城を明作州へ退けり同州の本郷にて小瀨右京進廣勝を討果し首をは御本陣へ送りたり松山一城許りになり家賴も討れけれは元親も夜に紛れ城を忍ひ出て落行ける處に岸より落て足なへ是非なく麓の賴久寺と云寺へ行切腹せり介錯をは粟屋助四郎と云者いたせり是は元來阿州三好家の者なるか子細有て牢人し二三ヶ年元親に扶助せられけるに依て也三村一家殘りなく討果され備中一國御隙も明同州猿掛の城には元清公おはしましけり石川一家の儀隆景公へ進せられけれは幸山の城には隆景公より坪井和泉守國弘隱岐守兩人置せられ勿論石川家の者ともは隆景公御被官に召置れたり備中松山の城には御本手より天野中務大輔元明を置れ知行一萬石遣されけり國吉の城には口羽中務大輔春良を置せられたる也

毛利四郎殿穗井田民部少輔元資家御相續の事

一此比備中の國平均になり國衆いつれも御案内いたされけり其内穗井田民部事實子なきに依て元就公御息の男内一人養子に下されけるやうにと御理あるによつて四男四郎殿を遣され早速御家督にて穗井田治部少輔元清と云けると也

因州私部（キサイチ）の麓合戰並城主降參の事

一天正三年の秋尼子勝久御退治として藝州より御人數を差向られけり一陣吉川元春公同嫡子元長公を大將として一手の衆には熊谷信直山内隆通天野紀伊守隆重椙原播磨守盛重の一族椙原河内守元光備後の國高須の城主其外都合二萬七千人後陣は小早川隆景公を大將として三好式部少輔隆亮嫡子新兵衛隆信同弟三郎左衛門隆行九代修理亮多賀の山入道久意其外歴々都合二萬餘人八月上旬藝州を打立て伯州矢走に着陣し玉ふ山名大藏大輔豐國此樣子を聞て牛尾大藏左衛門元貞に云けるは貴殿を遠方より加勢として引請今に一戰もせす兩川殿御待請に私部の城へ働へしとおもふはいかにと也牛尾尤と同意し同月廿二日一千五百の人數を卒し私部の山下へ押寄柵を破る城兵是を見て進、左吉兵衛を初め一千許鐵炮を打立相戰ふ其外城中の者とも左の山の尾を廻させ寄來るもへ山名叶はすして引退く牛尾元貞一手の者共敵數多切伏て引退きけり天正三年八月下旬兩川殿鳥執の麓に着給へは山名豐國二千餘人引卒して出麓の川に舟橋を懸て諸軍を渡し御馳走せり爰に吉川又二郎經言と云て十五歳に成玉ふか私部の城仕寄番所へ出われ敵來れかし經言も一鎗すへきものをと宣へは傳きにて在ける小坂越中守承り夫は雜兵の分捕と云て大將の望み玉ふ事にてはおしと諫めけれは其方申所尤なれとも夫は元春元長なとの事也我等は庶子にて有けれは自身手を碎てこそ名をも取へけれと仰られしか其詞に違はす私部の城兵夜中に打て出ける剋鎗を取て城兵を突立城中へ追込て歸られたり其後晝夜責詰稠しく鐵炮を打掛けるもへ私部の城中防き兼てそみえにける比は八月の末つ方木々の梢も色付て錦をさらす氣色なり敵も味方も折にふれ心を慰めける時しも楯の前へ武者一人出て寄手へ

申へき事あれは暫らく弓鐵炮を止らるへしと云けるゆへ定めて降參の侘言かと一同に鳴を靜めけれは我等御眠を覺さんとて綴りし發句に

山はやや勝色みする時雨かな

と吟しけれは元春公聞し召れあたりを御覽するに香川兵部少輔春景居けるゆへ脇を致せと仰付られ兵部取あへす

秋のあらしにおつるわさ露

と云けれは彼男第三をいたし其後城中へ入にける後に聞は尼子方の森脇市正氏直にてそ有けるかくて城中も寄手も入亂れ戰ひけるか城中叶はすとや思ひけん龜井新六郎茲矩城を明渡すへくの旨斷りけれは兩川殿御分別遂られ私部の城を請取せ城兵殘らす下城させられたり

一

尼子勝久鬼か城明退るゝ事附宮吉の城落去の事

一天正三年八月元春公隆景公兩將にて因州私部の城を攻取給へとも勝久並鹿之助か籠りたる若櫻の鬼か城いまた堅固なり此城は元來草刈か端城なれは同年八月中旬より草刈二郎重繼七千餘騎を卒し切返さんと押寄同月廿九日まて稠しく攻戰ふ城中よりも鐵炮せり合あり其後城を出防き戰ふ處に敵方の侍大將山崎藏人を始め數輩討取重繼勝利を得軍忠狀を捧るの處に輝元公御感判を居下され今に草刈か家にあり同年九月二日兩川殿因州へ御打入草刈に御加勢として椙原盛重香川兵部小阪越中守を差添られ都合三千餘騎草刈も一千餘騎にて同月十一日重繼采幣を取て攻蒐けれは尼子堪かね同十五日の夜城を捨て但馬の國へ敗北せり仍て重繼か家人山口太郎右衛門尉豐猶に人數を付若櫻の鬼か城に籠置けり夫より重繼は

杉原香川小阪一同に因州宮吉の城へ押寄たり此城には尼子方田公新左衛門同新助楯籠るの處に一同に攻蒐るに依て田公父子城を明て敗走す惣勢一時に乘入けれは殘りたる城中の兵四十餘人一命を捨て働き悉く討死せり難なく宮吉の城も落去して因州平均になり元春公隆景公ともに天正三年九月廿五日因州を引拂ひ玉ひ雲州平田まて御打入成れ小早川殿は平田より藝州へ御歸陣なり

攝州大阪の城中へ兵粮を納らるゝ事

一大阪本願寺顯如上人光佐と織田信長不和に相成上人大阪に城郭を搆へ諸國の門徒を賴るゝに依て信心の輩我先にと馳集り上人籠城せらるゝの處に天正四年の夏城中兵粮乏しくなり毛利家へ御見繼下されけるやうに猶御武威を以て本意を遂たく存するの通申越れたり輝元公御如在に思し召れすの通御返答なされ早速飯田越中守を御使に差上され其後兵粮御仕送として兒玉内藏大夫就英粟屋内藏允元次香川左衛門光景浦兵部丞宗勝野島大和守武吉同掃部助元吉村上八郎左衛門景廣等に仰付られ兵粮船六百餘艘警固船三百餘艘差上られ晝夜急きけるゆへ七月上旬播州室の津へ着岸せり信長公よりも木津川口に大船を掛置其外兵船三百餘艘にて西國よりの通路を塞れたり敵船の大將には大和の國の住人間鍋主馬兵衛、沼野伊賀守同越後守河内の國の住人椙原兵部丞宮崎鎌太夫寺田又右衛門尼ヶ崎の小畑花隈野口なと云者ともなり此方の衆談合せしめ三百餘艘の射手船を盪(ナン)立其跡に兵粮船を引付大阪川口へ押懸ける處に敵船三百餘艘盪出し防戰せり中國船は舟軍に馴けるゆへ敵船に迫入たり爰に村上八郎左衛門景廣自分の乘船を押立鐵炮を打掛けれは敵船とも三四間退きける處に押付一番に八郎左衛門敵船へ乘

入敵を突伏首を取續ひて家頼の侍とも乗込船中の者殘りなく突伏終に大船を乗取たり浦兵部宗勝野島掃部元吉も敵船へ乗移り敵を突伏切付大船二艘乗取小船は其數をしらす敵船の大將間鍋主馬兵衛沼野伊賀守同越後守椙原兵部丞同鹿目助野口小畑以下討死せり寺田又右衛門は海へ飛込一命を助りけりかく中國勢勝利を得大阪の城へ兵粮を納けると也

鹿目助に目介
目一鹿之

讃州元吉の城合戰の事

一天正五年讃州の浪人香川吉景事數年毛利家を頼み參り居たりけるか此比歸國を願出たり然は讃州多戸の郡元吉と云城に三好遠江守云侍罷出たり阿波の國より元吉の城へ取蒐りける由注進あり香川は元來三好か家臣なれとも毛利家へ御馳走遂けるゆへ香川を歸國仰付らるへしと思し召れける折から幸の儀なりとて天正五年穗井田治部少輔元清公を大將として福原出羽守元俊を差添られ八千の御人數渡海仰付られけり御先手として兒玉内藏大夫就英浦兵部宗勝井上又右衛門春忠其外警固衆引連元吉の城に磨臼山と云ける是に陣を取居ける所に阿州より元吉の城へは働すして警固衆の陣所へ押寄ける故浦兵部井上又右衛門二千の人數を以て同年七月廿一日一戰を遂即時に勝利を得たり末近勘兵衛山田判右衛門宇多田藤右衛門村上刑部少輔深野弘中等錦を合せ比類なき働せり中にも宇喜多事馬武者一人陸立一人討取高名諸人に抽するに依て御感狀下され今にあり其時三吉勢突て出兩方よりはさみ討阿州の兵百許討取ける處に元吉より一里の内に長尾梅喝とて阿州の家臣一城を搆へ居けるゆへ元吉の城普請堅固に仰付られ阿州と御取相の覺悟なり阿州より大勢出なは輝元公御渡海成るへしとの御規定にて備後

の三原に御在陣なされ御馬廻の衆八百餘騎先達て渡海仰付られたり隆景公は備中笠岡に御在陣なりされとも仙石少式と申仁取扱にて阿州よりは同名の侍兩人元吉の城の山下へ參りたり元清公元俊も御陣山より下給ひ兩人へ御相對にて三好遠江守阿州へ隨身せり此のとく御和談相濟元清公御歸成れけり

淡路岩屋の城の事

一天正五年淡州の在廳人菅平左衛門と云者岩屋の城に罷在毛利家へ屬しけるゆへ先年より兒玉内藏大夫就英を籠置れけり然る處に菅父子逆意を企て内藏大夫を打果すへき用意せし由密に其聞えあり内藏大夫存しけるはかゝる所にて犬死せんも口惜き次第なり一先藝州へ歸り重て討手に向ひ菅父子を退治すへしと存し取敢す引歸りて此樣子を言上せし處に香川左衛門尉光景是を承り從弟の冷泉民部元滿兩人云合せ岩屋の城へ罷向へくの通望み出けれは輝元公御感淺からす則兩人に御暇下され兒玉就英と三人乘船せし處に菅平左衛門同新右衛門より使者を以て藝州へ申上けるは兒玉殿虚説を聞れて引退るゝの通是非もなし御不審を晴さんかために寵愛の娘を人質として差下すの由にて其事も止香川冷泉戰はすして名譽を得たりかくて岩屋の城へ籠りける處に大坂天王寺より佐久間信盛か家人とも一千餘人夜討を懸たり折ふし香川夜廻し行合て相戰ひ既に香川討死とみえける處に冷泉民部出合切立けるによつて敵叶はすして引退く冷泉追掛十五人討果し首を取たり其後は無事にて守り居けり毛利家と秀吉と御和合の後三人とともに藝州へ歸りけり

播州上月の城攻並羽柴秀吉後詰の事

一天正六年四月播州佐用郡上月の城へ信長公より人數を籠らるゝの由山中鹿之助承り色々手引を憑み信長公へ對顏を遂尼子家傳來の名器松虫と云轡を進献せしめ御心安くなり御後願ひけるは毛利家へ多年の鬱憤深けれは今度上月の城へ尼子孫四郎勝久を人躰として籠城仰付られ鹿之助をも差添られなは隨分粉骨を盡し中西國への御案内者致すへくの由信長公へ云入けれは尼子勝久並鹿之助其外歴々差籠られたり其比宇喜多直家は毛利家へ馳走振なり夫もへ輝元公上月の城を攻取るへしと思し召れ元春公隆景公其外御一門御家老中召集られ御評定の所に各一同に然るへしとの儀もへ小早川殿御支配には穂井田治部少輔元清天野六郎左衛門尉元政宍戸安藝守隆家同嫡孫備前守元續國衆には三吉式部少輔隆亮多賀山入道久意久代新十郎楢崎彦右衛門信景平賀太郎左衛門信景平賀太郎左衛門尉隆家三村紀伊守親成清水長左衛門尉宗治草刈次郎重繼小笠原少輔七郎上原右衛門大夫元祐、田沼治部藏人、伊勢、細川の一族御旗本よりは福原上野介元俊桂三郎左衛門元相此外相加られ其勢二萬餘也吉川殿御支配には御嫡男治部少輔元長二男左近允元氏三男又二郎經吉（後に號廣家と）毛利七郎兵衛元康國衆には山内新左衛門尉隆通益田右衛門佐元祥（後入道牛庵）羽根兵庫元連佐波越後守興連同又右衛門尉都野駿河守三澤三郎右衛門尉爲清同攝津守爲虎宍戸五郎兵衛政慶多賀吉六天野紀伊守隆重同中務少輔元明三刀屋彈左衛門久扶古志玄蕃允豐繼湯野佐渡守家綱椙原播磨守盛重嫡子彌八郎元盛二男孫三郎豐盛有地右近南條伯耆入道元次小鴨官兵衛元伴山田出雲守重正小森和泉守吉田肥前守光倫日野左近景幸福與利治部少輔同藤兵衛、田利小曳、周布兵庫頭元兼祖式對馬守元家都合二萬五千餘人御舟

手は兒玉内藏大夫就英粟屋内藏允元次村上八郎左衛門尉景廣浦兵部亟宗勝以下軍船七百餘艘にて播磨潟明石須磨の浦に至まて警固せり宇喜多直家は病氣と號し家臣岡越前守戸川肥後守秀安明石飛驒守景親宇喜多七郎兵衛忠家長船紀伊守宇喜多淡路守岡强助沼新右衛門花房助兵衛直次中村三郎左衛門伊賀左衛門久隆富山半右衛門、市、五郎兵衛、芦田五郎太郎延原内藏允家次宇喜多河内守小原入道新明楢原監物景儀以下其勢一萬四千人差出し御旗本人數五千人惣して五萬餘の御人數なり天正六年三月三日輝元公吉田御出馬也元春公は雲州富田を御出馬有て作州高田通を押玉ふ隆景公も同日藝州沼田を御出馬成れ勢そろへ有て上月の城へ押寄惣勢より鐵炮を揃へ一時に打掛晝夜ともなく責ける處に上月の後詰として羽柴秀吉荒木攝津守村重四萬餘の人數にて同年四月晦日高倉山に陣を取

此山を狼か倉ともいふ楢崎請取の仕寄より大筒を仕掛城の矢倉塀を打崩しけり然る處に同年六月九日の夜周布兵庫頭元兼か請口へ城より夜討を掛けるゆへ元兼鎗を提け敵を追拂ひ數人突伏たる處に脇より敵又鎗を以て元兼を突三十三歳にて討死せり輝元公不便に思し召れ嫡子幼年なれとも跡職相違なく立遣されたり

播州上月の城合戰の事

一高倉山の麓に小川あり此川へ敵陣より朝こと手水に出けるゆへ宇喜多直家か被官中村三郎左衛門と云者と隆景公御内の井上彌兵衛景家と云合せ伏兵を置一同に出けれは案のとく敵數多出けるゆへ伏を起し鐵炮を以て馬乘一人雜兵三人打伏たる處に上方勢掛付此方は纔に四五十人なれは既に危くみえたりかゝる處へ宍道五郎兵衛政慶三百許にて助け來りされは又高倉山より上方勢中村孫平次

一氏（後式部少輔と云ふ）神子田半右衛門通清五百許にて打下し宍道井上中村と相戰ふ上方勢引續き押懸けるもへ味方の働はか〳〵しからす是を見て南條伯耆入道元次舍弟小鴨官兵衛元伴一千餘騎にて馳來るされとも中國勢旗色あしくに依て吉川殿御手都野主水境孫次郎湯頭助兵衛遠藤彌九郎足達彦左衛門繁澤殿御家中郷田次郎兵衛小早川殿御内包久内藏允椙原盛重家中渡邊傳左衛門所原彌太郎入江平内山田出雲守重正家中山田理兵衛同外記鍛冶屋市祐佐伯五郎四郎吉田肥前守光倫家中瀨屋孫右衛門此者とも鎗を提けかけ付敵を突伏首を取中にも吉川殿の衆遠藤彌九郎討死し南條元次か家人所原兵庫も討死せりされは又上方勢二萬許上月の郷へ打下す南條椙原宍道中村此人數五千許押立られ次第に旗色惡くみえける處に椙原盛重嫡子彌八郎元盛二男景盛吉田肥前守光倫川口刑部少輔を相伴ひ二千餘にて打て出る吉川殿衆には今田中務忠久吉川式部經家山縣四郎右衛門森脇市郎右衛門春方香川兵部春景を先として一千餘人盛重と一手になり打てかゝる是を見て雲伯石の歴々一萬餘騎蒐出す先勢合戰始るをみて吉川元長公同弟元氏經言馬を出され杉原南條も相加る吉田の御旗本も馬を馳て打向ふ高倉山秀吉の旗本をはしめ蜂屋氏家伊賀稲葉佐久間なと打て出備を立る先勢は中村孫平次神子田半右衛門尾藤甚右衛門大谷刑部少輔木下備中守以下五千餘人其次は黒田官兵衛孝高同吉兵衛同兵庫蜂須賀彦右衛門家政一柳市助堀尾茂助吉晴三千餘騎にて備を立る其次は信長公より後詰の上方勢都合四萬餘の人數なり元春公より軍使を以て敵の樣躰を見せられけりされは此間の雨に上月の川洪水にて敵も味方も渡し兼たる處に吉川經言と名乘て一番に此川に馬を乘入給ふ續ひて

同勢を先にと渡せり元長元氏此を見玉ひ經言うたすなと其儘馬を乘入玉へは杉原南條續ひて打渡しけり上方勢押立られて引退く二陣の上方勢歴々馬を進めて馳來る元長公采幣を振て下知し玉へは士卒とも居敷て鐵砲を打蒐馬上の侍數多打て落したりさしも勇める上方勢足もとしどろに成けれは吉川勢勝に乘て突てかゝる杉原も一手に成て押かゝる京勢いよ〳〵崩れ立て高倉山の麓まて引退く秀吉の本陣より又大勢打下す元長公見玉ひ采幣を振上て下知し玉へは左近允元氏又次郎經言杉原盛重同元盛父子吉川殿御内の今田中務忠久吉川式部經家香川兵部少輔春景其外伯州の侍吉田肥前守光倫牛尾大藏左衞門元貞を始として懸出敵のかゝるを待ける處に敵も最前の勢ひに違ひ掛らすして扣へ居たりよつて穗井田治部少輔元清公此方の備より右の方へ打出られける處に高倉山の茂りに隱れ居たる上方勢出て鐵炮を打かけ後には麓へ下りて弓鐵炮を射かけ打かゝるに依て元清公一手の人數はかりにて一文字に突てかゝれは一支へもせす素の茂りへ迯入けるさきに元清公股に鐵炮中り手を負玉へとも事ともせすして働き玉へは中國勢一同に掛りて戰ふに依て秀吉の本陣より崩れて引退く中國勢勝に乘て追かけ〳〵敵を討取けりされとも逃るを追事敵により所による也長追は無用のよし元長公御下知に依て中國勢も打入なりかく上方勢と初ての一戰に勝利を得られ元春公隆景公御滿悅し給ふなり上方勢は敗軍して天正六年六月廿九日書寫山へ引退きけり

兒玉小次郎元兼と藪内匠助忠綱鎗を合す事

一此比高倉山の麓の合戰見合として輝元公より兒玉小次郎元兼宇多田與三左衞門勝之を頭として御鐵炮衆三百人付置れ其外歴々相添

差出されたり小次郎高倉山の麓へ行て見れは敵堤を楯に取て鐵炮を打懸るに依て鎗を提てかゝる處に若林藤兵衞傍に居て小次郎か草摺を取て引留今少し待玉へよき時分を申へしとて扣させ敵陣を見合せ時分よしといへは小次郎鎗取て突てかゝる一手の衆われ劣らしと掛りされは敵叶はすして引退藪一村ある處を楯に取て待懸たり小次郎續ひて追懸兒玉小次郎元兼と名乘は中村内匠允忠綱と名乘て出一番鎗を合せたり其場藪を隔てゝの事なれは互に休み息を入て又取かゝり度々鎗を合せけれとも更に勝負わかたす敵味方見物し花やかなる鎗とて皆人稱美せりされは内匠か持たる鎗十文字なれは藪にかゝり猶豫せし處を小次郎か被官三戸善兵衞と云者鎗を取けるもへ小次郎か手柄になり上方にても其隱れなく内匠も口をきく武士なれは毛利家の侍大將兒玉小次郎と鎗にて仕合ひ互に勝負付すと吹調し其譽れによつて内匠名字を藪と改めたるの由是よりして元兼手柄一入名高く成たるの由也

上月落城並山中鹿之助幸盛を討果るゝ事

一上月の城後詰の上方勢敗軍に依て拘る事なりかたく鹿之助幸盛より使者を出し元春公隆景公へ云けるは此度の企は全く勝久の所存にあらす神西三郎左衞門通兼か所爲なれは神西に切腹致さすへくの間勝久其外城兵の一命御助け下されけるやうにと達て御佗言申けれとも両川殿御分別なきもへ勝久へ鹿之助云れけるは再三斷りけれとも承引なけれは力に及はす御切腹成るゝの外なし某儀は面目もなけれとも降人に出元春へ近き差達へ御死後の弔ひにいたすへしと云けれは勝久聞れ我等事一度尼子と名乘大將の號を汚せは生前の本懷是に過す汝は命を全し時節を以て尼子の家を再興の志

し何よりの忠勤たるへしと宣ひ天正六年七月三日勝久切腹也加藤彦四郎經盛も切腹し神西三郎左衛門通兼は先達て自殺す鹿之助幸盛は降人に成て雜兵同前に下城せしかは一命を助置れ防州德地の内にて知行三千石充行はれ御家人に召置るへしの旨元春公隆景公より御誓紙遣され上月より防州へ差下されたり然れは兩川殿より かゝる御仕成の事を輝元公御存しなきにや備中松山の麓阿部川の渡にて鹿之助上下三十人はと御果し成れたり此鹿之助事先年伯州末石の城にて果さるへくの處に種々侘言に依て元春公助置れ剩領地二千石遣され末石より雲州へ差下らるゝの處に其恩賞を忘却せしめ伯州の内尾高と云處にて番衆を謀り夜中に拔て上方へ參り信長公へ取入かゝる矛楯に及へは輝元公に於てはとかく此度は御果し成るへく御下意なりされは鹿之助は阿部川の渡りを先へ渡り跡人數の船を待とて川岸の下につくはひ居ける處を天野元明の家人井上新左衛門といふもの鹿之助か後へ立廻り一刀打付けれは鹿之助河へ飛込たり福間彦右衛門元明其儘飛込川の中にて組相鹿之助か首を押付たり其時河田太郎左衛門飛込て押付居ける首を其儘討取けり仍て福間も恙なく勝利を得河田と相功名に成たり三上平兵衛好智も一同に取付鹿之助か鬚斗付の長脇差をもぎ取たり鹿之助か緣者に柴橋角右衛門と云者鹿之助か刀を持又大海といふ茶入を首にかけて居けるを渡邊又左衛門と宇多田與三左衛門勝之兩人にて討果し首は宇多田か取渡邊は刀と茶入を取たりかくて此二品を上へ差出ける處に茶入は御用になしとて戻し遣され刀は常々鹿之助荒身國行を秘藏せしか夫に紛れなしとて召上られたり

温故私記卷第十四

草刈太郎左衞門尉重繼軍忠の事

一天正六年毛利より播州上月の城攻の時草刈太郎左衞門重繼事は敵國の境目によつて作州に差置れたり此比宇喜多和泉守直家信長へ内通の聞えあれは宇喜多か押へとして重繼上月へ御供致さす仍て家臣草刈右馬允盛正黑岩土佐守繼澄兩人を手頭として人數八百餘相添御馳走いたしけりされは重繼か舍兄草刈三郎左衞門景繼か代に信長公より今度西國への先手致さるゝにおゐては取立らるへくの通山中鹿之助幸盛を以て申越れたり景繼事は父衞繼代より毛利家に屬し御馳走遂るといへとも御取立もなく其上因州の武田左衞門尉高信と草刈加賀守衞繼と合戰せしめ草刈事武田か持分因州岩井郡を切取て領知とするの處に武田事毛利家へ降參し御斷いたす

吉継一に吉次

に依て景継代に至り岩井郡を武田方へ返し遣すへくの旨毛利家より御内意に付景継曲なく存する折からなれは信長公へ一味の返答せり依て羽柴筑前守秀吉を播州へ差下さるゝの條申談し馳走あるへし景継恩賞望のとく宛行はるへくの旨天正三年三月信長公御朱印を成下され大谷慶松事（後刑部吉継と號）使節として山伏の姿に出立罷越けるの處に作州高田に於て槍崎彈正少弼元兼か手の者怪しみ捕へて懐中を捜し見るに信長公の御朱印に景継一味の通歴然たり慶松をは眞の山伏と思ひ佗言に任せ差もるし件の御朱印を取て隆景公へ差上るの處に草刈か家臣草刈右馬允盛正黑岩土佐守継澄山口太郎左衞尉豐猶中島彌助米山岩見守貞經中村十兵衞尉光継此六人を藝州沼田へ召寄られ隆景公御對面あつて信長公の御朱印を御見せ成れ仰られけるは景継心底案外の仕形なり早速押寄討果さるへくなれとも父加賀守衞継代より毛利家に對し別して馳走淺からされは用捨せり然る間旁申合せ景継に腹を切せなは舍弟次郎重継に家を継せけるやうに隆景取計へくの由御意に付各忝御請いたし猶隆景公におゐても御別心なき趣六人に對し御神文遣され又六人の内中村十兵衞尉光継は人質として沼田に殘りたり隆景公よりも田坂と云者を人質として遣されたり殘る五人は作州へ歸て家人共と評定の上天正三年四月廿七日景継に切腹いたさせ其趣隆景公へ達し重継舍弟草刈與次郎重久を人質として毛利家へ差出し次郎重継十八歳の時當分の城主に定られたり景継切腹の後家中上下別條なく重継を取立けれは三ヶ年を經て後重継に家督仰付られ領知相違なく宛行はれ名を太郎左衞門尉重継と改られ猶家督の時先例に任せ毛利家に對し御屈致に於ては御見放成れましくの通御神文下され

並家賴へも件の六人の外に草刈淡路守秀繼白岩八郎兵衞繼俱中島彌次郎繼家を加へて以上九人の者へ同前の御神文下され今に草刈の家にあり抑草刈の素性を尋ぬれは天兒屋根の命二十二代大職冠鎌足其男左大臣不比等より七代田原藤太秀郷天慶三年朝敵平將門を討其賞として下野武藏常陸三ヶ國の守護職を賜り鎮守府將軍に任す其男千常より九代に當りて安藝三郎公繼、是、草刈氏の元祖也寛元年中足利尾張守家氏奥州守護となる下向の時公繼も家氏に從て下る奥州斯波郡草刈の鄕に住するに依て在名を以て初て草刈と稱す其男左近將監親繼より四代備前守貞繼軍功の賞として尊氏公より因州知頭郡を賜る曆應元年初て因幡の國に下り淀山の城を築て居城とす其男太郎左衞門氏繼軍功によつて美作の國苫郡を賜る夫より兩郡の領主となる其男越後守滿繼より五代加賀守衞繼猛將たるに依て數郡を切取處々に城廓を搆へ軍功多く天文十一年初て毛利家に屬し其男三郎左衞門景繼處々におゐて軍功あり其後子細有て弟太郎左衞門重繼に家督仰付られ草刈の宗領職を賜り毛利家に對し軍忠を盡せりされは草刈加賀守衞繼か代に作州にも亦東北條郡に高山の城を築て天文二年より居城とす爾來因幡にて高房郡氣多郡八束郡岩井郡作州にて莢田郡吉野郡大庭郡眞島郡久米郡等數郡を切取て領知とし處々に城を築て人數を籠置たりされは景繼切腹の後信長公より山中鹿之助幸盛片崎市助重忠兩將に五千餘騎を屬して天正三年六月因州知頭郡淀山の城へ出張し是を防く草刈か家臣黑岩土佐守人數千許にて淀山の城より突て出合戰に及ひ片崎市祐重忠を討取剩鹿之助か馬印まで奪取今に草刈か家にあり其時黑岩か軍功に依て輝元公より御感狀を下されたりされは景繼切

莢田は英田か

腹の刻草刈の端城等暫らく人數を引取に依て鹿之助因州へ亂れ入處々切隨へしかとも淀山の城をは重繼持てたへ一國一城の御屆せり此比因州氣多郡鹿野の城には上方より龜井武藏守茲矩を籠置の處に同年七月朔日重繼押よせ攻るといへとも堅固に持詰急に落去しかたく此鹿野の城といへるは因州第一の大山鷲峰山の麓にあり彼山より流るゝ水を用水にする城也重繼内々案内を存するに依て家臣宇都宮遠江守家綱に人數二百許添て彼山へ忍はせ水の手を堀切ける故鹿野の城抱かたく則城に火を掛其紛れに明退たり仍て右の山を流山と名付今に云傳えし由也其外高房郡吉岡九峯（ツヽラヲ）岩井の城等を責かへし素のとく人數を入置たり此時鹿之助尼子勝久と共に因州八束郡の内若櫻の鬼か城へ楯籠るの處に同年八月に重繼責落し則草刈か家人山口太郎左衛門豊猶を籠置れ軍忠狀を捧けれは

○岩井の郡

裏に輝元公御判を居下され今に彼家にあり同年宇喜多直家か舅中山備中守作州へ亂入の時草刈右馬允盛正か籠りし作州苫郡祝山にて是をさゝへ勝利を得るに依て輝元公より重繼に對し御感の御書を下され今にあり又天正五年秀吉播州下向の時大谷慶松を以て重繼方へ信長公へ一味の事申越るゝといへとも返答に及はす使者を追返せり其後又秀吉より使番新兎猪之助長次と云者を重繼方へ差越れ信長へ一味有て西國への先手致さるゝに於ては本領の外伯州の内を宛行はるへくの由秀吉奉書を持來れり重繼曾て承引せす新兎猪之助をは重繼手自討果し其首を敵味方の境目へ獄門に掛上方への手切せり秀吉の奉書をは輝元公へ差上たり仍て上月落城の後秀吉より宮部善乗坊法印繼潤木下備中守重堅宇喜多直家三人二萬餘の人數にて作州へ働き久米の北條郡油木西坪に陣取の所に重繼

か家臣竹内主計助友長同郡高土の城にて相戰ふ重繼は大庭寺畑の城におゐて相支へ翌天正七年まて對陣におよひ直家又作州眞島吉野兩郡へも人數を差出の處に眞島郡注連山の城主小瀨右京進廣勝高田の城主山本出雲守晴信相防き吉野郡の敵をは草刈左馬允鈴木主計新免伊賀守長重か一族等追拂ひたり同年四月中旬に宇喜多勢を追散し草刈勝利を得直家は備前岡山へ引納秀吉の人數は播州へ引退きたり此時輝元公御感の御書あり此比作州久米の南條郡荒神山に付城を構へ宇喜多か家臣花房助兵衛直次を籠置處に重繼時日を移さす責破りける故直家怒て播州境へ張出草刈か端城黄田郡鷹の巣の城主江見越中守を押へて淀山祝山兩城を責んとす同五月下旬重繼黄田郡へ打出先手草刈右馬允草刈淡路守等二千餘の人數を以て敵を追拂ひたり則兩人に對し隆景公より御感の御書今にあり

同七月又直家作州へ打て出同州の諸城祝山舛形笹山等へは宇喜多より人數を分て攻たり宇喜多か先手小原入道新明二千餘騎にて重繼か居城高山へ押寄る重繼か舍弟草刈與次郎重久は幼年より毛利家へ人質に出十七歳まて戰場に臨まさる事を無念に存し毛利家へ斷りけるは兄なりける重繼籠城せし由見屆たくの通をのへ人質として草刈淡路守か二男草刈又三郎季房を差置其身は高山の城へ參り同月十日手廻の若者十四五騎召具し城を出て突てかゝる敵方より伏兵を置迹を取切に依て與次郎を始め主從悉く討死せり重久か一手の者三百人續て打出るの處に是又數多討死せしに依て高山城中の軍兵突て出んとすれとも重繼制して許さす翌十一日の未明に黑岩土佐守山口太郎左衛門尉兩將敵にかまはす備前道へ押出重繼か旗本と牒し合せ小原か陣へ討て蒐り前後より兩手を以て敵陣を

甲一頭
甲頭に

放火し大將小原新明をは山口太郎左衞門豊猶討取たり重繼は直に笹山の城を圍みたる明石飛驒守景親か陣へ討てかゝる笹山の城中よりも中島彌助突て出敵を追崩す兩陣にて討取首數甲頭六百二十雜兵ともに九百餘人討取軍忠狀を捧裏に輝元公御判を居られ並に御感狀あり家賴へも御感狀下され何れも今に草刈か家にあり重繼其夜は笹山に一夜陣をすへ翌日又舛形の城へ出張の手賦りする處に其夜敵陣引退く故重繼も家城へ打納けり夫もへ祝山の城をは直家か弟宇喜多與太郎基家相圍むの處に草刈右馬允盛正城を守りて防戰す是又敵を追崩し基家程なく岡山へ引納たり其後は上方勢計策を入るに依て作州寺畑の城主榎原兵庫助草刈に一味を變して宇喜多に隨身す同年十一月重繼居城を打出沼木新右衞門か籠りし岩屋の城を攻此時宇喜多か後詰花房助兵衞直次秀吉よりの加勢木下備中守重堅と共に備作の境川口に陣を取ける處に重繼諸勢はを岩屋の城の押へのために殘し置自身小勢を勝つて度々川口に討て出兵粮を切取敵の通路を支ふるに依て敵方の後詰叶はすして敗北すこの比輝元公も備中表迄御出張あり宇喜多持分の忍山の城を攻られけれは宇喜多忍山へ後詰し毛利家と對陣の半小早川殿一手より通路切仰付られける處に宇喜多本陣より備前表へ遣す飛脚の者を捕へ討果しけれは懷中に書狀あり是を見るに草刈太郎左衞門事每度味方を相支へ此度の合戰にも自身先勢に交り相働き度々味方敗軍に及へり重ての合戰には先手の中を心懸討とらは其中に太郎左衞門有へし其方術肝要の由とあり其書狀を隆景公へ差上けれは隆景公より草刈か家臣黑岩土佐守方へ御書遣され其文に曰太郎左衞門殿每度御魁の由尤御手柄なれとも御越度に於ては其時弓矢の種を

失ひける間以來磯と御用捨然るへし此通旁の御意見肝要御賢慮の所に候とあり其御書今に草刈の家にあり天正八年正月輝元公兩川殿備中より作州へ御發向榎原兵庫助か籠りたる大寺畑の城を攻らる重繼は我一手を以て岩屋の城を攻落す此時草刈左馬助繼正は重手を負なから一番乘を致し御感狀を下されたり其節宇喜多寺畑へ後詰として人數を差出す處に草刈右馬允盛正支ふるに依て宇喜多寺畑へ後詰延引の内落城すされは宇喜多自身草刈右馬允か籠りし祝山へ押寄たり同年二月下旬に重繼又祝山へ後詰するの處に羽柴秀吉二萬餘の人數にて播州より作州へ發向して宇喜多と牒し合せ天王山に陣を取らる同三月四日敵方兩勢打出るによつて重繼進んて相戰ひ勝利を得終に兩陣を追崩せり此時秀吉の旗本侍大將隱岐土佐守を草刈か家人飯田新之允と云者討取軍忠狀を捧輝元公御判を居下され今にあり此比重繼か陣取たる作州吉野郡竹山へ秀吉より又兩使を差越れ重繼上方へ一味の事再三に及へり最前新免猪之助を以て達しける知行方を除き因幡美作兩國を宛行ふへくの旨信長公の御朱印秀吉直判の神文僞りなきの旨申越れけり重繼則其兩使を搦取て一人の出家をは敵味方へ知せんかため因作の諸士をわか陣へ招き寄上方への手切として右の出家をは討果し殘る一人に信長公の御朱印秀吉の神文を相添へ此比毛利家より檢使として作州に置れける藏田與三右衛門尉房貞を以て輝元公作州月田（ツタ）の御陣所へ差上ける處に秀吉よりの使をは同國高田へ引上られ楢崎彈正少弼元兼に仰付られはり附にかけさせ信長の御朱印秀吉の神文をは重繼に返し下され此度の感狀として輝元公兩川殿より重繼に對し御神文成下され今に草刈の家にあり又毛利家より榎原兵庫助か

籠りたる笹吹の城市瀬三郎兵衛か居城宮山等を攻落し夫より祝山の後詰として先手の勢中途まて打出るの處に秀吉終に天王寺を敗軍して播州書寫山へ打納られ宇喜多は備前へ引退くに依て毛利家も御歸陣あり則方角の御仕置堅固に仰付られ重繼よりも岩屋の城には家人石田新之允を籠置けり其後秀吉宇喜多を牒し合せ樣々謀を廻らし重繼か領知へ出張の評議を決せらる宮部善乘坊木下備中守龜井武藏守同州表の先手として打出るの處に山口太郎左衛門若櫻の鬼か城より出て大谷と云所に待伏をして敵の不意を討て勝利を得美作へは宇喜多直家先手として作州東西の口より打入重繼か家臣草刈右馬允盛正か籠りし祝山並片山木工助久義か籠りたる沖構へ（院庄の城とも云）相働向城を築きて兩城を取卷數日對陣に及へとも重繼又謀を以て同七月三日居城高山より出て夜掛にして沖構の寄手を追散らしけり此時久米の南條郡蓮下池の城に在し難波十郎左衛門尉同又六沖構の城方角なる故加勢として敵を防くに依て敵方より小松と云所に向城を築き人數を入置けり仍て重繼則小松の城を攻取蓮下池も運を開けり又祝山の城は宇喜多勢に杉原七郎左衛門家次蜂須賀彦右衛門家政等の上方勢馳加りて取圍の處に重繼三千餘の人數にて後詰せしめ是を追拂ひ剩敵方の向城備前灘の城を不意に責落すかく度々の合戰に勝利を得何れも御感狀あり右のとく作州の諸城等難儀の節毛利家より御加勢として湯原豐前守春綱同子彈正忠元綱小川右衛門兵衛鹽冶豐後守元貞祝山の城へ籠られ口羽中務少輔春良をは沖構の城まて差出され因州鬼か城へも牛尾大藏左衛門を籠られたり其剋秀吉謀に依て因州但州伯州表まて上方に屬する者多く此者ともに牒し合せ天正八年の夏秀吉因州へ發向

の刻草刈重繼か領知因州高房郡吉岡の城へ取蒐攻られたり當城には幕下吉岡安藝入道質仲同嫡子左京亮次男將監楯籠りける故重繼よりも加勢として石谷藤兵衛彼是人數八百許にて城を守り羽柴勢を追拂ひ剩秀吉同苗の者を始首數五百餘級討捕けり此時吉岡左京亮輝元公より御感狀下されたり其節重繼も因州淀山の城まて打出上方勢宮部善乘坊繼潤中村孫平次一氏等と相戰ふ敵五十二人討取此時宇喜多又同州表の手當として作州祝山の城を責んとす時に草刈右馬允盛正は本城高山にあり剩祝山加番の内楢原監物景儀と云者元は宇喜多か家人なれは敵方へ内通するといへとも福田三右衛門盛雅平尾彦兵衛等祝山在城し毛利家よりの加勢と共に粉骨を盡し敵悉く追拂へり又福田居城作州西北條郡舛形へも敵大勢寄掛ける處に盛雅か嫡子福田源助繼昌在城し草刈民部少輔繼賴百々の城

より加勢して是又運を開き御感の御書あり又作州岩尾山の城主山名忠重入道か一族山名豐國に牒し合せて秀吉に隨身せしめ重繼に心變りするに依て天正八年十月重繼則岩尾山の城を攻て山名忠重幷宇喜多か加勢原田左京助を討捕軍忠狀を捧け輝元公御袖判を下され今にありかくて岩尾山には中西四郎右衛門吉蕃を籠置たり同九年秀吉再ひ因州へ出張して鳥執の城を責らるゝ時も吉岡か城方角なれは度々敵陣へ打入忍討をし敵を騷動させけるに依て同七月十二日杉原七郎左衛門家次吉岡か端城龜山へ相働く是又即時追拂へり同月十九日秀吉自身急に吉岡の城へ寄掛らるゝといへとも城兵堅固に持抱へ一日の中に兩度合戰に及ひ高房郡九峰の城よりも黑岩修理進同市右衛門尉妹尾彌次郎等六百許打て出吉岡へ加勢し味方兩勢を以て逐立勝利を得敵數百人討果せり此時秀吉の先手の

大將多賀文藏を討取首をは重繼か旗本より吉岡の城に籠りたる安部又十郎と云者捕也かく度々の合戰に手柄して輝元公より御感狀を下され今に吉岡か子孫所持せり時に草刈重繼は因州淀山の城に在住するの處に秀吉より木下備中守重堅を淀山の押として差向られけれは重繼進んて追拂ひ重繼は其儘因州布袋表へ出て陣を取り敵の樣躰を窺ひ居ける處に同十月鳥執落城に依て秀吉即時重繼か領知を攻らるへしとの催しある處に吉川元春公鳥執後詰として伯州まて御着陣たりといへともはや落城に依て元春公は夫より南條伯耆守元次舍弟小鴨左衞門佐元伴か居城を攻詰られける處に秀吉も先此者ともを救わんとて天正九年十月下旬伯州へ發向し高山に陣を取馬野山に於て吉川元春公と對陣の時草刈重繼も因州吉岡表へ出張して上方勢の後に陣を取秀吉伯州より退陣の時重繼羽柴勢の横合より突てかゝる吉岡安藝守同左京亮同將監等は吉岡の城に籠りしか毛利家方をいたし吉岡か一族三百人許にて秀吉の旗本へ無二無三に駈入敵數輩討取其上秀吉の馬印金の瓢簞を持たる者を吉岡將監討捕勝閑をわけ湖水の端に竿結わたし首掛ならへ金の瓢簞の馬印を立置今天下に隱れなき弓取羽柴筑前守秀吉を吉岡か手へ討捕たり其證據には金の瓢簞の馬印是にありと高聲に喚り其後上方勢の内にも宗徒の頸三十餘級並金の瓢簞の馬印を相添元春公へ送り進上せり秀吉此事を聞玉ひ大に怒りて羽柴七左衞門龜井武藝守を大將として三千餘騎を差添吉岡か城へ押寄けれは城兵切て出敵を追拂ひよき敵十七人討取たり吉岡か働き聞し召れ輝元公より御感狀下され秀吉の馬印金の瓢簞をは返し下され吉岡質仲か嫡子吉岡左近亮此子孫吉岡孫兵衞乘延（孫兵衞今は長府にて綱元公の家中なり）今に持傳

えたり同年十一月重繼か領地因州知頭の郡淀山の城へも秀吉より歴々差向られたり重繼又淀山へ張出敵を追拂ひ堅固に城を持詰ける故知頭郡内の落谷と云所に上方より向城を築き木下備中守重堅祖奥土佐守六百許楯籠の處に重繼夜掛に押寄攻崩し祖奥土佐守を重繼か家人進市兵衛塚原一傳兩人して討取たり備中守をは討洩しけれとも殘兵悉く討果し此時も軍忠狀を捧け輝元公御袖判を下されこにあり落谷の城には草刈右馬允盛正林刑部左衛門を籠置けり其後中村越中守宗繼同肥前守光繼（始は號十兵衛と）父子か居城因州唐櫃の城を上方勢取詰又九峯の城へも付城を拵へ通路を取切攻けれとも兩城ともに堅固に持拔けり其折節宇喜多も草刈重繼因州の留主を窺ひ處々に付城を構へ自身は作州勝南條郡へ打出の處に同年十二月十日重繼事同郡瓜生原にて直家と相戰ひ勝利を得續て敵方の付城稻荷山を責て大將原田三河守を討取たりされとも此比近國皆上方に隨ひ重繼か領知敵の巷に成たり又伯州南條小鴨秀吉に隨身せしむるゆへ因州の通路も叶はす仍て毛利家よりの御救ひ成かたくの間ひとつにつはみ然るへしとの儀にて重繼因州淀山の城を引取の處に敵方より則淀山の城へ木下隱岐守を籠置其外端城等へ敵方の人數を入置たり然る所に其後吉川元春公南條を追のけ因州表へ御出張有へくの由仰聞らるゝに依て重繼又淀山其外の城を攻返す此時木下隱岐守をは草刈か家人中島彌次郎繼家討とり軍忠狀を輝元公御判を成下され今にあり淀山の城には素のとく草刈淡路守季繼を籠置たり天正十年毛利家上方と御和平の後も宇喜多直家等重繼を討て己か功に立んとて宮部善乘坊繼潤木下備中守重堅龜井武藏守玆矩垣屋隱岐守磯部兵部大輔なとい因州へ打て出宇喜多も亦

作州へ働く天正十一年八月重繼因州表にて木下備中守磯部兵部大輔等と戰ひ歷々を討取軍忠狀を捧け裏に輝元公御判居下され今にあり同十八日宇喜多か付城石米を攻破り大將河橋彌五兵衞を進、市兵衞討取軍忠狀を捧るの處に輝元公御判を居下され此時も家賴へ銘々御感狀下され今にあり又作州佐良山の城を攻て伊利谷河内守長昌、廣戸等を追退け城を破却せし時も軍忠狀を捧輝元公御判を居下され其上家賴銘々へ御感狀下され何れも今にあり天正五年秀吉播州へ下向同六年宇喜多毛利家を背きける以後は年々重繼か領分へ働き既に備中伯耆までも打入處々に付城を構へて通路を塞しに依て備中多治郡の城より美作の內高田岩屋舛形の城まて傳へ一筋ならては藝州よりも通しも成難けれとも重繼持分の諸城堅固に相守り天正六年より同十一年まて六ヶ年の間籠城を遂たり備中高松の城落去の節も重繼一筋に思ひ極め罷在の處に御和平に相成御國分の時因作兩州は爭ひの國なるに依て上方へ御付成れたり依て輝元公より御使者として井上新兵衞兩川殿より一人充差添られ重繼に仰渡されけるは今度京藝和平に付因作兩州を上方へ付ける間重繼居城を明渡し下城致さるへしさあらは替地遣さるへく若上方勢を引請一戰有へしと存極られなは是非もなく上方の和平を違返せしめ其城へ後詰を成るへしとなり重繼御請には敵地の境に在城いたし堅く守りけるも御爲を存して也今におゐて上方の御和平御違變も然るへからす此上は先祖以來の舊領なれとも追々切取ける所領と一同に上方へ相渡すへしとて則下城せり其時輝元公より重繼並家臣共へも添御書を下され今にあり夫より重繼事備後國山中と云所に置せられ堪忍料として備後防長の內にて領知下されたり其

後隆景公豫州御拜領ゆへ輝元公へ仰談られ豫州へ重繼召連られ白實の城主に仰付られたり然る處隆景公ほとなく筑前へ御國替によつて又御供し筑前にても重繼を寶滿の城主に仰付られ其後筑後國一揆蜂起の時も重繼粉骨を盡しけりされは輝元公隆景公より重繼名字を改め然るへくの通御内意に依て筑前の國の在名を取福岡と改む又高麗陣の時も渡海せしめ朝鮮に於て軍忠を盡せり歸朝の後宗像氏貞の跡職を賜り彼知行を領す猶又太閤秀吉より筑後の國の内三井三原兩郡にて七ヶ村領知を賜り太閤の御朱印頂戴し今に草刈か家にあり此御朱印に草刈太郎左衞門殿と當るに依て其以後又福岡を改めて素の草刈と稱す隆景公御逝去の後御養子金吾秀秋公の御手に屬し濃州關ヶ原へ參りけれとも秀秋公逆意の聞えあるに依て重繼は大阪へ歸り輝元公へ相届けたり此時も重繼心底御感の旨堅田大和守元慶に對し輝元公御直書あり大和守より重繼に賜り今に草刈の家にあり重繼忠を先するの故に輝元公忝御意なされ領知下し置れ其後對馬守に受領仰付られたり數々の御感狀草刈太郎左衞門繼年か家にあり

宇喜多和泉守直家心替の事

一天正六年の春宇喜多和泉守直家事信長公へ御味方致すへくの由密に通達せしゆへ毛利家より播州上月の城攻の時は所勞と號し斷り て出す舍弟七郎兵衞忠家其外家臣とも數多差出したり上月落城して夫より館町の城責とらるへしとて黑澤表へ御出張にて陣を取玉ふ宇喜多直家は明石飛驒守景親か居城八幡山に陣を取明石か家臣に後藤丹波守と云もの作州三星の城主にて直家か婿也毛利家へ無二の御馳走致しけるゆへ直家たはかり呼よせ後藤を討果しけり其

後日限をして直家より吉川殿小早川殿へ振舞の御案内を致しけり元春公隆景公ともに御出有へくとの儀なりける處に八月二日の夜明石飛驒守内々毛利家へ御馳走せしもへ舍弟明石勘二郎を使にて云越けるは直家振舞の御案内しけるは全御馳走の所存にてはなし兩川殿を城中へ招寄せ打果すへき企なりと告知せり兩川殿驚き玉ひ翌三日の早天に直家方へ御使を遣され輝元公より急用申來るもへ兩人共に只今當地出馬せり追付發向せしめ御意得へくの通仰入られ御歸陣成れけり

南條伯耆守元次兄弟逆意の事

一天正六年南條伯耆守元次事上月より家城へ歸りける處に尼子家の浪人福山二郎左衛門光貞と云者諫けるは信長公只今は日本に肩を並ふる弓取なし毛利家も信長の爲に亡ふへしされは毛利家へ屬したる侍は根を斷葉を枯さん事眼前なりはやく信長公へ御味方然るへしと再三勸めけるに依て舍弟小鴨左衛門佐元伴其外南條備前守同九郎左衛門なと談合せしむるの處に一同然るへしとて信長公に一味致すへくの通秀吉まて申達し毛利家へ逆意せし也此段元春公聞し召れ早速小田出雲守重正を藝州へ呼寄られ南條心替りのたん其方は存せすやと御尋ねあり出雲守驚き入此樣子更に存せすの通誓紙を以て理りけりさらは南條兄弟に諫めを入福山を討て出すへしと仰付られたり出雲守畏て請合早々伯州へ歸りけれは福山心許なく存けるにや出雲守所へ見廻として參りけるゆへ討手を云付心やすくもてなし山田十左衛門に目くはし致しけれは十左衛門拔打に福山を切たり出雲守か嫡子藏人も續て切掛さしもの福山もやすくと討れけり仍て南條兄弟出雲守か館へ押寄ける處に山田方に

も無勢ゐへ一方を打破り懸ぬけ藝州へ下りけり其後元春公伯州へ御出馬有て南條元次御退治の御調略成れ先南條か家城羽衣石へ付城仰付られける處に元次より元春公に對し聊別心に存奉らすの通御理として家老の津村兵庫助叔父甥兩人差越種々御侘言いたしけれとも元春公聞し召分られぬ樣子ゆへ兩使夜中に欠落して因州の大仙坊へ北込けり椙原播磨守盛重か家來所原木工助と云者大仙坊へ蒐付兩使を生捕て差出しけれは備中國花見濱にて張付に仰付られたり元春公御立腹の子細は元次事四五ヶ年以前に吉川河内守經久か娘を妻室に遣され別て御懇意淺からすの處に其恩を忘却し逆意せしゐへ一入御憤り强けれは御調略を以て討果さるへく思し召れ御にくしみの色を見せられす南條達て斷るに任せ御分別の旨仰聞られ夫よりは前々のとく睦しく仰談られたりされは南條元次は常々躍を好て心を慰めけるゐへ元春公御氣に應し世に面白きものは躍にしくはなしとて夜てと若き者共に躍らせて興し玉ふ或時元春公南條方へ使者を以て仰遣されけるは此方躍を其方へ進すへくの間御覽あるへし又其方の躍を此方へ差越れなは見物すへしとあれは南條斜ならす悅んて日限を定め急に躍の場を構へ城外城裏其用意嚴重也吉川殿には一百餘人の若者血氣盛んにして健なるを撰ひ一樣の袖なし羽織短くして目に立たるひよう紋をつけ一列に鉢卷をし大小は一樣に金銀の二つ卷をし尻をねしからけ前後警固の武士二十餘人躍子同前の出立にて兼約の日の暮つ方に羽衣石の城へ躍を掛られたり南條か城兵とも袴を着し庭上に伺候す元次も椽端まてこれ出其外男女童五百餘人殿外殿裏に並ひ居て見物す其躍の歌に此方の御庭を借申さふ淀川の深き底なる鯉鮒を袖も濡さ

す取は不思儀しやといふの類なり終には明年參ろふ又參ろふと謠ひ納る時大鼓の頭を打は其相圖を以て躍子警固一度に噇と刀を拔切て蒐る城中の騷動大形ならす庭上に並居たる武士とも拔合相戰ふといへとも不意の事なれは城中數多討死し手負は數をしらす其間に南條元次は女性童を引連落行しかは城中皆北去て一人も留らす南條も係る武略の躍とは敢てしらすほう〳〵城を落行けると也

市川少輔七郎逆意の事

一天正六年市川伊豆守經好は播州上月御陣の御供せしに依て嫡子市川少輔七郎事山口鴻の峰の御城番相勤たり兒玉周防守就方を差添られ其外歴々城に籠置れけるに依て各城を堅守するの處に少輔七郎逆意に付城中騷動せしかとも各能働き少輔七郎を生捕て上月へ樣子申上ける處に早速市川經好を差下され經好より少輔七郎に切腹を申付たり其時分内藤小七郎別して作舞けるゆへ元春公より兒玉周防守就方へ御念入たる御書遣され輝元公よりも兒玉就方に對し小七郎能作舞けるとの御書遣されたり少輔七郎果て以後山口市中の者にも魂付て物に狂ひけるゆへ眞の少輔七郎ならは采女の山郭公と云所の小鼓の手を常々御自慢なり御打あれとて小鼓を渡しけれは成ほと打たるのよし云傳えたり

攝州大坂川口に於て番船を切取事

一天正六年信長公よりの仰に依て勢州の九鬼大隅守嘉隆大船數十艘にて泉州堺の浦につき大坂往來の船路を塞く大坂川口には白船黑船とて大船二艘かけ置矢倉をあけ城のとくに構へ紀州熊野の侍葛畠と云者を舟大將として數百の人數にて大坂城中へ西國よりの通路を守るに依て城中兵粮盡城兵難儀に及へり仍て兵粮御無心の事

又々上人より毛利家へ申越るゝゆへ浦兵部丞宗勝を都合の見合として警固衆殘らす差上されける處に彼樓船に大筒を仕掛近所へも寄付す徒に數日を送り是非なくの間無二無三に押懸乘取へしと談合し我先にと乘掛たり村上八郎左衛門景廣は惣の船よりも先へ乘付たり樓船の者とも大筒小筒を以て稠しく防きけれとも警固衆事ともせす取梶の方より乘込は大人數もへ船を覆し敵みな海へ飛込けるを熊手にかけて引よせ數百人の首を刎たり宗勝は云に及はす警固衆皆々大手柄せり上人光佐よりも宗勝方へ手柄を感し書狀差越れたり中國勢兩度ともに粉骨を盡し城中へ兵粮を納恙なく歸帆せしと也

荒木攝津守村重か居城花熊を乘取事並荒木御味方に參る事

一攝津兵庫より三里西の宮の方に花熊と云城あり荒木攝津守村重抱の城なり人數を籠置毛利家より大坂へ御手遣の支りになる故浦兵部宗勝を大將にて警固衆差上され安武船其外軍船數百艘にて兵庫に着し安武船に大筒を仕掛花熊へ押寄ける處に城兵稠しく働くといへとも大筒にて塀矢倉を打崩し海陸より責掛けれは叶はすして城兵夜に紛れ欠落せしに依て則城を乘取此段注進しけれは御番勢として香川美作守光景杉次郎左衛門尉元家に人數御付なされ檢使には桂民部少輔廣繁を差越れ警固衆はくたりけり然る處に天正六年十月荒木攝津守より輝元公へ御味方いたすへくの通御侘言いひて信長公へ逆意せり仍て信長公より宮内卿法印友閑明智日向守光秀萬見仙千代歴々荒木に異見せし處に納得いたし我等存分ならすの處を信長公差免されなは安土へ出仕すへしとて三人の使節を歸しける處に家老とも云けるは一旦逆意せし物を各異見にて御隨身

ありとも向後赦免ある信長公にてはなし迚も思し召立れたる事なれは早く御背き然るへしと云けれは攝州尤と存しいよ〳〵逆意に極りたりされは又小寺官兵衛參り異見せしを荒木承知せす却て小寺を生捕にもすへきやうに見えけれは小寺夜に紛れ歸りたり荒木事毛利家へ一味せしゆへ花熊の城を荒木に渡し御番衆何れもくたる筈になりし處織田城之助殿發向の風聞有によつて其節浦兵部宗勝淡路の岩屋に罷在此樣子承りけるゆへ加勢に上り籠城し相待の處に案のことく城之助殿三萬の人數にて押寄られ城兵も防戰の覺悟せし處に申の剋に人數を引拂ひ退陣せられけり其後は敵方より働ける事もなかりけり

美作の國處々の城を攻取らるゝ事

一天正七年十二月上旬輝元公作州へ御發向として吉田の庄御出馬なり元春公隆景公元長公經言公御供其勢三萬にて作州御出張同月九日小寺畑へ押寄らるゝの處に城主榎原平兵衛尉降參せし故御分別遂られ城を請取同十六日大寺畑へ押懸玉ふ折ふし砥石山の城兵缺落せし處に吉川衆懸付數十人討取たり大寺畑の城中に逆意の者あり同州高田の城に置れける楢崎彈正元兼方へ相圖して城中の固屋に火を懸けるゆへ彈正忠一番に掛付切岸へ付たり元春公の一手是を見て切岸まて詰懸城兵叶はす切腹の覺悟にて城外へ出ける處に宇喜多直家より加勢に籠られける富山半右衛門貞家なる者云けるは旁の心底不覺也叶はさる時は城を枕にして討死有へしとかく踏留るに付尤と同心せし者三十人城中へ引入ける時跡に殘りたる者を招きけれは吉川衆味方と存し攻込ける處を城兵矢先を揃へて射立朝枝源次郎討死し今田玄蕃其外手負數多あり其後仕寄を付間近

く攻寄けれは大寺畑の榎原兵庫助御侘言いたし是又御分別遂られ兵庫助は家城笹吹へ退きけり又やかて笹吹の城をも明退けり此響に岩屋の城も落去せしゐへ宮山の城を取卷るゝの處に隆景公山見として城山の尾頭へ御上り直樣御退成れける時城兵出て付送たり隆景公の御内衆返し合せ敵を追拂ひけり此時兒玉平左衞門景榮討死せり又城兵六百騎許かけ出相働けり元長公一千餘騎にて出玉へは早速引入けり各城の門際まて責付ける處に今田孫十郎井上左馬允森脇彌五郎小笠原次郎右衞門手を負同朋正阿彌討死せりされは宮山の城主も御侘言致し城を明渡し備前へ落行けるゐへ作州平均になり仍て輝元公兩川殿寺畑に御在陣成れけり

備中の賀茂に於て味方敗軍の事

一宇喜多直家より伊賀左衞門尉久隆を籠置ける加茂の小倉へ付城仰付らるへく御談合の剋小倉より出城に持ける福山と云城明退けり幸の儀なれは是を付城に取拵へ御持せ成るへくと也されは備中才田の城に籠置れける番衆最早入されは此者ともを福山の城に籠らるへしとて仰渡されける處に手頭兩人御理には自分の儀は御意に任すへきなれとも家人とも引續き難儀と申へくなり最前御約束の領知只今仰渡されなは家人ともをいさめ御馳走致すへくの由餘儀なく思し召れたれとも歴々御判遣されける並もあれは兩人許先達て唯今知行遣されけるやうには成せられかたくの間兩人は御番相成すまて也とて差置れ同州松山の城に檢使として置せられたり桂源右衞門元信に仰渡さるへしとて召寄られ兒玉三郎右衞門尉元良國司右京進元相兩人御使にて源右衞門事去年以來松山の城に罷在苦勞せりされは加茂の小倉へ付城を仰付らるへく思し召れける處

福山の城明退幸の儀なれは引續き苦勞なから福山の城へ參り相働なは御祝着たるへくの旨仰渡されける處に源右衛門承り御意のとく賀茂へ付城仰付られける時は松山は檢使に及はす何方にて御用に立も同前の儀なれは御意次第と御請いたせり隆景公聞し召れ尤なる御請なれは此段輝元公へ能々申上よと兒玉國司兩人の御使へ仰聞られたりされ、は桂元信を籠られ福山の城普請仰付られて備中の竹の庄に輝元公隆景公御陣替成れたり其後同國の有漢（うかん）と云所より御陣替の時御手廻衆を以て賀茂の小倉の城御手遣の働き仰付られける時若き者はやりて天正八年四月十四日の事なりしか一圓寐もせす夜半より打立小倉の城より三里の間を走りて着けれは敵方には毛利家御陣替の通りを承り小倉の城山下へ遁集りけるゆへ毛利家の各地下人を追立小倉の城山の頭へ乘上りける時城の者共毛利家の兵小勢にて跡勢も續さるを見切て悉く城を出弓鐵砲を以て打立けれは叶はすして敗軍に及へり頭分衆粟屋與十郎元信には井上源右衛門山縣三郎兵衛此外一所の衆御付成れ神田惣四郎元忠には岡惣左衛門元良三輪加賀守新庄又右衛門御付なされ兒玉小次郎元兼には櫻井與次郎何れも所衆數多御付なりされは粟屋與十郎一番に取て返し敵數多突伏討死なり御付の井上源右衛門山縣三郎兵衛一所の侍大田垣傳右衛門何れも返し合せ働き討死せり粟屋孫次郎信賢にも歴々御付あり粟屋彌四郎元綱兒玉與七郎元房榎本二郎右衛門小畑助九郎何れも手頭の粟屋孫次郎に付てよく凌き退きける內兒玉與七郎元房は討死せり小倉の城より二里ほとある福山下り口一入難儀せし時一所の衆家人とも百人許先立て引退きける處に粟屋彌四郎榎本二郎右衛門小畑助九郎此三人手頭の粟屋孫二郎

に心添いたし手負又草臥て退兼ける者を救ひて引けり中にも小畑助九郎は兒玉小次郎一所の侍小田小二郎と云者を引懸退けり神田惣四郎返し合せ働きけれ共數ヶ所手を負退き兼けるゆへ粟屋孫次郎か乗替の馬にいたきのせ難所を連退けり小田は手負を肩に懸なから追付て心添せし孫二郎事惣四郎を乗替の馬にのせ連のきける翌日輝元公聞し召れ御感狀下されたり兒玉小次郎元兼も百許の人數にて防き戰ひけるゆへ其間に敗軍の味方漸々に引退きけり後には小次郎も數ヶ所疵を蒙り難儀に及ひけれとも一人付居けるゆへ馬にいたきのせ引退けり井上七郎兵衛元直たひ〳〵返し合せ敵數多射伏り岡宗左衛門元良高き所へ馬を乗上見合引ける者をおくり退きけり三澤家人野尻藏人と云者も一兩度返し合せ手柄せり河原六郎右衛門山縣三郎兵衛小寺右衛門轉藤右衛門齋藤佐右衛門大田垣傳右衛門其他侍衆歴々都合三十九人討死せり是を賀茂崩れといへり此軍以後伊賀左衛門事如何樣の儀なるや宇喜多直家より左衛門か家老に河原四郎左衛門と云者あり是に計策を加へ四郎左衛門請合て馬の血出いたすとて主の左衛門を呼振舞しける時毒飼せし翌日相果たり此左衛門事は明石飛驒守景親か聟なり飛驒守は直家家老なれとも毛利家へ御馳走いたしけり上月の城落去の後直家より吉川殿小早川殿へ振舞の御案内いたし討果すへき心入なりける處に飛驒守より兩川殿へ内意をいたし虎口を遁れ玉へり左衛門儀も毛利家へ御馳走の心底なるを直家存しけるゆへかくやと察しられたり其後福山の城は此方より六かしき小川あり然るへからすと て川より此方にあり勝山と云山に城築かれ桂源右衛門元信赤川次郎左衛門元時岡宗左衛門元良を籠置れたり又備中の三村家の侍に

竹井惣左衛門直定をも差添られ天正八年五月三日に勝山の城に籠りけり輝元公隆景公は五月五日に松山の城へ御打納なされ元春公は作州寺畑より伯州へ御越成れたり

牛尾大藏左衛門尉元貞を鳥執の城に籠置るゝ事

一天正八年の夏山名大藏大輔豐國事羽柴秀吉發向の刻家老を呼集め秀吉に降參し家を續くへしやと談合の處に家臣森下出羽守通與中村對馬守春次承り尤も秀吉の武威强くなれとも先年元就雲州發向の砌毛利家へ屬すへき旨仰斷られ其後山中鹿之助等尼子勝久を大將に取立當國へ打入ける時毛利家の好を飜し尼子へ一味して其後吉川小早川大軍を以て尼子勝久退治として因州私部の城へ發向の由聞えけれは尼子一味の誓約を變し又もや毛利家へ斷りて屬し今又秀吉へ御一味有へしとの儀武將たる人の有まし御心底口惜き事なりと云けれは豐國尤と存し秀吉へ同心なかりし處に豐國か娘を張付木に上せて鳥執の麓に掛置秀吉より城中へ使を遣し豐國娘の命も惜く又因幡も望みからは能々分別せられよと有けれは豐國此上は是非に及はすとて御味方致すへき旨返答し使者を差返しけり則秀吉領掌にて同州の內二郡豐國に宛行はれたり仍て森下中村兩臣ともに豐國に心を放ち表裏ある大將の家人と世上に唱られては是非なしとて藝州へ御味方いたすへき通申上因幡一國切隨へ本領を取返すへき覺悟せし故豐國事鳥執を遁れ去て播州姫路へ上り秀吉へ云けるは家臣とも逆意いたし牢々の躰に罷成たり御威光を以て本知安堵いたし度の旨理りたりさて山名豐國鳥執の城遁れ去けれは森下中村より吉川殿へ使者を以て兩人事御味方になり御馳走致すへくの間鳥執へ城督一人差越けるやうにと申越方角の事な

れは同州若櫻の鬼か城に置れたる牛尾大藏左衞門元貞を鳥執へ參るへくの旨仰渡され牛尾早速鳥執へ參り近邊の一揆ともを退治せり然れは豊國領分諸寄と云城に礒邊木工允と云者籠り居たり城中に野心の者出來牛尾方へ内通せし故牛尾事森下中村と談合し一千餘騎にて押懸切岸の際まて責付けれは諸寄の城中にも屈竟の者數多居ける故弓鐵炮にて働きけれとも牛尾三百人許にて急に攻込取出の曲輪乗取續ひて二の曲輪へ乗込ける處に城兵稠しく防戰し牛尾の侍數多討死せり牛尾元貞自身塀に手を懸乗上る處を膝の節を篦深に射させ是非なく人に懸つて退きけり大將手を負けれは諸卒皆引退きけり牛尾は吉川殿へ理り手疵養生として雲州へ歸り代りとして市川雅樂允を鳥執へ遣されたり

輝元公作州へ御發向の事

一天正八年の秋宇喜多直家ふと作州へ出馬いたし毛利家の御人數籠置れける小城二ヶ所責落し夫より福田三右衞門盛雅か籠りし作州祝山の城へ押寄んとするによつて御加勢として湯原豊前守春綱小川右衞門兵衞元政鹽冶豊後守元貞を遣されたり宇喜多取詰攻ける上城中に槍原監物景儀と云者逆意せしゆへ既に危くみえける處に福田、並、右衞門兵衞、豊前守、豊後守身命を捨て働き逆意の者を追出し二三の丸堅固に持詰早速兒玉善右衞門元貫を使にて樣子委しく注進せりよつて天正八年九月三日輝元公吉田を御出馬成れ伊多波に至て御着陣翌日山中へ御陣替なり隆景公は阿佐井へ御出馬夫より成羽に御滯留にて輝元公御着を御待なり元春公は因州鳥執へ御番勢籠させられ其上南條伯耆守元次逆意に付羽衣石岩倉の城へ付城仰付られ彼是に御隙入御遲成れけり其後御三家仰談られ作州へ御

伊波に多
多一伊岐

發向なされけれは敵はとく退散せしもへ毛利家抱への城々へ兵粮御籠させ御仕置仰付られ御歸陣なり此時右城番の者ともへ輝元公より御感の御書を遣されけり

備前蜂か濱合戰の事

一天正八年宇喜多與八郎を大將にて人數七百餘引卒し備中へ發向せり猿掛屋懸まて燒働せし折ふし毛利家の軍勢出合八幡の馬場にて迫合し兒玉小次郎元兼名譽の鎗をせり其後此方よりは穗井田元清公を大將として御出成れたり與八郎事備前の兒島へ働きけるもへ同所蜂か濱にて合戰あり有地美作守就信組打の高名せり其赴は敵一人鎗を提て懸り美作守是を見るに内々存したる相撲の上手にて是と組合なは六かしく存しける内はや鎗を合せたり美作守は長刀にて二つ三つ打合ける處に敵鎗を捨て組付たり案のとく美作守を即時組伏けれとも美作守屈竟の家人を共に召連けるもへ敵を引伏美作守に首を捕せたり美作守か一族有地右近信之其場にて別の敵に渡し合せ高名せり古志半右衛門事も鎗を合せ首を取て高名せり然る處に飛落組の足輕五郎兵衛と云者林の中に隱れ居て宇喜多與八郎采幣を取て下知する所を楢の木をすり臺にして打けれは鐵炮眞只中へ中り馬上より打落したり元清公の御被官水川と云者與八郎か首を取大將討死のもへ殘兵敗軍に及ひしを追討に數百人打取御勝利を得られたり右の足輕には名字を下され侍に成れ楢の木五郎兵衛といへり

吉川式部少輔經家鳥執籠城の事

一天正九年の春森下出羽入道道與中村對馬守春次兩人より吉川殿へ申越けるは大將一人御越のやうに願ひけり元春公御吟味の上吉川

野藤
田に一野

式部少輔經家を召て其方事太儀なから因州鳥執へ參り相勤なは御祝着たるへくの旨仰渡されたり式部少輔謹て御心入有難し何方にて御用に立けるも同前也敵地の境ひ肝要なる所へ遣されけるたん忝仕合なり堅固に御用に立へくの通御請あり御付の衆には松岡安右衛門森脇若狹守山縣筑後守就相山縣源右衛門朝枝加賀守武永四郎兵衛井尻又右衛門高助右衛門大草因幡守長和三郎左衛門長岡信濃守野藤内藏同九郎右衛門其外國衆差添られ都合其勢八百人餘新庄を出足せり式部少輔備の先へ重縁に結せたる首桶を持せけり誠に討死と覺悟なりとて諸人感したり又鳥執より一里程ありて丸山と云城あり是へは山縣九右衛門を城替に遣されけり國衆には奈佐日本之助鹽屋周防守佐々木三郎左衛門以下五百人楯籠りたり輕(カル)の湊には大船數艘かけ置警固せり式部少輔入城し頓て城中を巡見の處に兵粮藏に米纔あるもへ相尋られけれは先月若州より米買參り高直に買取たり追付新米出來けるとて少々かこひ置たりける米をも賣たる通いへり式部少輔立腹にて籠城の人數沙汰をさせては雜兵男女ともに四千人餘あり兩月の養ひにも足されは早々兵粮籠られけるやうにと注進せり其上信長公の仰にて秀吉當秋は鳥執の城責らるゝの由されは吉川元春後詰たるへくの間人數を加へられけるやうにと上方へ秀吉より申付られて一萬餘騎加へらるゝの通風聞なり鳥執は名城の事なれは兵粮さへ續きなは容易に落城致すましくの通云來れり元春公聞し召れ杉原盛重方へ仰遣され少しは粮米籠けれとも四千人餘の飯米なれは一ヶ月の粮もなし運送仰付らるへくの由にて大船四艘に粮米を積田中宗右衛門豊島源二郎有間亦八白井藤次郎同新右衛門同七郎左衛門片田新右衛門手嶋藤次郎

此等乘廻りける處に丹波の警固百艘および乘懸船軍あり思ひ寄さる事なれは一命を捨爰を專度と防き戰ふといへとも多勢に無勢叶はすして田中豐嶋有間手嶋白井五人の者とも討死す天正九年七月五日羽柴美濃守一萬餘騎を引卒し山見として丸山の東の山に打上り頓て引取けるを見て城中より奈佐か甥瀧三左衞門を先とし足輕を以て遠矢を射懸たり同七日羽柴筑前守秀吉六萬餘騎を卒し鳥執丸山兩城其間一里ありけるを一つに取圍み玉ふ秀吉は摩仁帝釋山に本陣を居られける西の方には中村孫平次少阿彌山名大藏大輔豐國木下備中守重堅初は荒木平太夫村俊と云神子田半右衞門通清蜂須賀彦右衞門家正小寺官兵衞木村隼人加藤作内東表には信長公よりの加勢一萬餘騎控へたり雁金山には織田の於萬、宮部善乘坊備前よりの援兵明石飛驒守景親長船紀伊守福田五郎左衞門楢原監物宇喜多七郎兵衞忠家岡越前守以上八千餘騎續ひて陣を取また藝州後詰の押として秋里村に城を搆へ杉原七郎左衞門家次に一萬餘騎を相添渡り口を押へたり又灘邊には淺野彌兵衞警固船三百艘掛ならへて扣たり丸山の東口には羽柴美濃守秀長（後大和大納言と號）増屋駿河守山名但馬守昭豐北の山には蓮冶隱岐守儀部兵部大輔泰、龜井武藏守茲矩武田蓑部以下尺寸の地もなく陣を取り己か陣々に芝土手高く築上柵の木二重三重に結廻し堀をはり塀を付矢狹間をけく明夜は一間に挑灯一つ充掛置たりされは城中より足輕を出しあひしらひけれとも上方勢一圓出合す鐵炮を打かくるはかり也城と敵陣との間に袋川と云大河あつて城兵打出働事相成す數日を送り兵粮いよ〳〵乏しく此由藝州へ注進せしゆへ元春公より有地右近信之新見左衞門兩人に仰付られ鳥執へ兵粮入よと下知をなし玉へとも敵陣透ま

なければ力に及はす取引けり其後蜂須賀彦右衛門家政か手より人數を出し大見物をいたしける處に吉川式部少輔經家渡邊太郎左衛門元政を招き云けるハ敵ハさき所へ出ける間足輕を召連打て出花々しく働をして目を覺させられかしと有けれは元政承り老木に花を咲せよとの仰一入添し心の花をも今日散して御目に懸へしとて足輕三十人すくり召連て出たりされは元政兄弟同前に云合せける中村又右衛門と云者を同伴し出度の通式部少輔へ相斷り兩人一同に打て出敵を目に懸一文字に進みける處に物蔭より伏兵起り跡先より討て懸り太郎左衛門渡し合せ敵一人討伏首を取て立わかる處に敵大勢取卷終に太郎左衛門討死し又右衛門も敵と引組差違へ一所に討死せり足輕の内大津木權兵衛と云者敵を討とり切拔て本陣へ歸りたりいよ〳〵鳥執の城も兵粮盡けれは城中の雜人原城の尾へいて草木の若葉を摘けるをみて上方勢の中より若者とも懸合を雜人原を少々討たり是をみて因州の軍兵とも待伏をして待處に敵又翌日も雜人原を討とらんと尾崎へ上り來を因州の者とも不圖伏兵を起し切て懸る敵一とらへもこらへすして引退を我先にと追かけ上方勢數多討取けり

吉川經家其外切腹の事

一天正九年十月廿日羽柴秀吉より鳥執の城主吉川式部少輔方へ堀尾茂助吉晴を使にて云越れけるは去る七月以來互に對陣せしめ數日を送りけり此上は和平をいたし式部殿を初め城兵まて藝州へ送り屆進すへしされとも其中に森下出羽守中村對馬守鹽冶周防守なとは山名譜代の家臣として已か立身の爲に主人を追出す事前代未聞の不忠なり又奈佐日本之助は海賊の張本として往來の舟を切取諸

人を惱す大惡人なれは此者なとには切腹させ見懲しめに致すへくとの口上なり城中よりは野田左衞門小野太郎左衞門罷出口上を承り式部少輔に云聞せけれは經家暫らく思案し今日大將の號を受當城に籠りたる諸士の命を司りなから國方の森下中村なとを殺し詮なき命を助りて爭か國元へ歸るへくや返答には仰越るゝの赴承り屆けたり我等一人切腹致すへくの間城兵殘らす命を助らるゝに於ては本望たるへくとて堀尾を差返され其後又秀吉より茂助を差越れ式部少輔切腹致されなは城中何れも別條なく藝州送り屆くへく此たん誓紙を以て堅約致すへくの間判形筆本見屆の仁差越れけるやうにとなり式部少輔承り御誓紙下されける上檢使差越れなは切腹致すへくの由返事の上以前の使野田左衞門小野太郎左衞門を秀吉の本陣へ差越けれは秀吉誓紙相調られ兩人筆本見屆誓紙を請取歸りたり早速檢使として堀尾茂助吉晴を差越れたり式部少輔に付置れける諸士其外暇乞の盃を廻らし事終りて後衣裳を改め表へ出茂助に相對せしめ時の挨拶なとすみ唐櫃に腰を掛我等首は信長公實檢に入へくなれは能討といひて腹十文字にかき切首をのへて討せける誠前代未聞の義士なりと稱美せり靜間傳之允介錯し福光小三郎若鶴神右衞門殉死せり森下出羽守中村對馬守も同席にて切腹せしかは五人の首を請取茂助本陣へ歸りたり丸山の城にて奈佐日本助鹽冶周防守佐々木三郎左衞門切腹其外城中の面々雜兵妻子等まておくり屆られたり

溫故私記卷第十五

輝元公鳥執の城後詰として御出馬並秀吉元春對陣の事

一天正九年十月中旬因州鳥執の城後詰として輝元公藝州吉田を御出馬にて雲州富田へ御着陣なり御先手には吉川元春公同元長公小早川隆景公宍戸隆家天野元政毛利元康國衆には熊谷豐前守元直益田越中守元祥三刀屋彈正久扶等都合三千餘騎也元春公は十月廿五日伯州馬野山へ御着陣也翌日は伯州大峰へ御陣を寄らるへくとの御規定なりける處に鳥執落城の到來あり然る處に秀吉毛利家と一戰を遂んとて伯州へ打越同廿七日馬野山の向ひ高山に打上り馬野山を目の下に見おろし數萬の大勢嶺も谷も一面に陣なり元春公御陣所馬野山の左は湖水後に橋津川ありて形のとくなる切所なり山田出雲守重政に仰付られ橋津川の橋を切落させ湖水の渡し舟も悉く

陸へ引上櫓械をも本陣へ取上敵合の道二筋作らせられたり國衆云れけるは元春公は有無の一戰と見えたり杉原盛重人數を加へても六千ほどの小勢にて上方六萬餘の大軍と一戰に及ひて十に一つも味方の勝利有まし元春公へ異見すへしとて各一同に本陣へ參られけれは元春公御出合にていつに替らす色々の會釋あり御咄の序に各敵陣を見られよ薄雪降て此方には面白けれとも秀吉は此寒風を凌き嘸迷惑せらるへき抔とて餘念もなくみえけれは終に異見の發語もならす各退出せり元春公頓て焚火にて背をあふり玉ひ御近習の衆に御雜談なとありされとも皆人は十死一生の合戰必定太儀と存し雜兵に至るまて覺悟を詰たり翌廿八日秀吉は南條元次か城へ兵粮を籠させ敵勢段々に峰を傳ひ谷へ下るとみえたり吉川殿より井上平右衞門山縣惣右衞門に鐵炮百挺仰付あつて松か崎と云處へ差出されたり檢使には今田玄蕃を遣され兩人の者とも鐵炮を打蒐させけれは敵大勢出ると相聞えたり元春公願ふ所なりとて先元長經言出給へ我等は秀吉旗本の備を見合せ出へしと仰らるゝに依て杉原盛重父子熊谷伊豆守信直同豊前守二千餘騎にて元長公經言公同前に松ヶ崎へ打て出る南條元次舍弟小鴨元伴等秀吉の陣に居て云けるは唯今吉川元長兄弟備を出したり御人數を打下されなは輙く打取へきと云けれは秀吉尤と同意し先手の各へ云渡されけるは藤堂與右衞門高虎中村式部少輔神子田右半衞門龜井武藏守玆矩等我先にと押下す其勢一萬四五千の人數續ひてみえたり元長公經言公二千餘騎にて打向ひ備を立て待玉ふ然れとも秀吉の本陣より軍使を以て敵相いたすましきの旨堅く制られけるに依て上方勢悉く人數を引揚たり吉川殿にも備を入給ふ其後晝夜三日は秀吉も對陣

し玉ふされとも元春公無二の御覺悟なり輝元公後詰として大軍を卒し伯州津原見まて御出張其勢雲州富田まて打續けれは秀吉一戰にも及はす十一月朔日高山を開陣有て因州鳥執まて打入られけれは輝元公も藝州吉田へ御馬を納られたり

小早川隆景公敵地境目の城主へ仰渡さるゝ事

一天正十年正月敵地境目の城督衆を三原へ召寄られ隆景公仰渡されけるは織田上總介信長中國を退治せんとて大軍を卒し當夏は備前へ發向の風聞あり各守らるゝ處の城々合戰の巷なるへし其内信長より計策を廻らし味方に招かれなは信長へ志しある面々は其心に任らるへし古より其例ある習ひなれは聊か遺恨なしと有けれは城主何れも御請には口惜き仰事なり御心許なく思召某ともをいかて大事の境目に差置れけるや努々二心有ましく唯一筋に一命を捨御用に立へくの通隆景聞し召れ各の心底祝着淺からすとて軍談と終り饗應の上何れもへ御脇差を遣され各頂戴し此度の防戰御勝利の上又々目出度御祝ひに合へしと云其時清水長左衛門宗治各え云けるは唯今の御請某におゐては心得かたし其子細は信長の先將として秀吉發向たるへしさあらは人數十萬餘騎は堅くあるへし境目の小城面々の持口にて防戰し始終勝利を得へしとは聊存せす只一戰に及ひ叶はさるときは城を枕にして切腹の外なし其爲にこそ御脇差を下されると三度頂戴して退出せり其一言實にも義士なりとは後にそ思ひ合されける

羽柴筑前守秀吉備中表へ發向の事

一羽柴秀吉は信長の仰を蒙り天正十年三月十五日播州姫路を出馬し備前表へ出張あり播磨但馬因幡の軍勢馳集る信長公よりも加勢と

して五畿内の人數を差添られ其勢六萬餘騎なり先宇喜多直家方へ大谷慶松（後刑部常繼）を以て備中表發向の通相達らるゝに依て宇喜多直家同子八郎秀家是は漸く十一歳なれは伯父の宇喜多七郎兵衛忠家を介添なり其外戸川平右衛門明石飛驒守景親同弟勘次郎長船紀伊守岡越前守福田五郎左衛門延原内藏允市三郎兵衛芦田五郎太郎小原新兵衛尉沼木新右衛門宇喜多河内守富山半右衛門洲波隼人入道如慶宮本四郎左衛門等を先として其勢二萬餘騎先陣に進む秀吉の勢を合せて八萬餘騎備後の國境備中の澁倉山の麓にある鐵床と云山を城に取拵へ宇喜多方より延原内藏允を手頭にて加番數多籠置たり爰に毛利家の先將小早川左衛門佐隆景公は宇喜多上方へ現形に付天正十年五月廿一日鐵床山へ押寄攻らるゝの處に城兵突て出互に鎗を合せ火花を散して相戰ひ小早川殿手へ數輩討取勝利を得られたり延原か被官難波源助をは御本手の岡宗左衛門元良討取て高名し輝元公より御感譽の御書下されかりかくて備中表御仕置仰付られ先鐵床山の向城として毛利家より宮地山と云へ城を拵へ乃美少輔十郎を手頭にて加番竹井惣左衛門並方角の者なれは船木藤左衛門其外歴々籠置れたり鐵床山と宮地山兩城の間に小川あり城と川との間は二十町許有へし宮城山の艮に當り一里餘ありて備中の忍山と云城あり是は備前より持て宇喜多信濃守同孫四郎と兩將にて人數を相添籠置たり秀吉備前表へ下向の前年天正九年九月に隆景公の御一分にて取詰られたり備前岡山より後詰として人數を差出すといへとも矢屆へもよる事相成す城兵術もなく同年十一月の末に御斷いたし城中の者一命を助けられなは信濃守孫四郎兩人切腹いたすへくの由に付聞し召分られ城主兩將切腹せり城をは御

請取せ毛利家より忍山の城普請仰付られ同年十二月末桂左衛門大夫元重岡惣左衛門元良を頭分として加番數多相添籠られたり又忍山の上に鎌倉山といひて聲届きにあり忍山を見下し城中をも見さかし矢も届きけるゆへ鎌倉山を城に仰付られ桂源右衛門元信野山宮内兼續兩人（野山、備中衆一城を持たる人なり）其外鐵砲の者二百人相添籠置れたり又鐵床山の城より一里の内に清水長左衛門宗治か籠りたる高松の城あり夫より一里の内に鴨の城とて平城あり本丸には桂民部大輔廣繁西の丸には上山兵庫元泰東の丸には生石中務丞と云者を籠置れたり又鴨の城より聲届きに日幡の城あり是には上原右衛門大夫元祐を籠られ又日幡の城より一里ほと南に松島と云城あり是には小早川殿御親類梨羽中務大輔景宗と云人を籠られ此人も一廉覺えの人なり松島より一里ほと東に廣瀨といふ城あり三方ともに一里程は沼にて人馬の足たゝす以の外の切所なり是にも隆景公の御家中山縣四郎左衛門井上豊後守有景其外歴々籠られたり又高松の近所に冠山と云小城あり是は清水長左衛門宗治か一手の侍林三郎右衛門重眞か居城なり加勢として鳥越左兵衛松田左門を籠置れたり（松田事素備前中國の守護たる人の末也此度重て籠りたり）林重眞か悴與三郎宗重は清水宗治に付居れる故高松の城へ籠りたり又中嶋大炊助行秀は中嶋の屋敷構に舍弟中嶋九右衛門を籠置自分は高松の城へ籠りけり

清水長左衛門尉宗治由來の事

一備中の國の石川左衛門佐と云者は備中の奥郡を領知として高松の城に居住せり幕下に屬する侍には長谷川掃部清水長左衛門宗治生石中務丞林三郎右衛門尉重眞中嶋大炊助行秀五人或は一郡或は半郡を領知して一城を持たる者とも也備中の奥郡の内を鈴木備中守

重信秋山内藏允親俊兩人も領知せりされは石川實子なきに依て奥郡の鈴木か末子筑前守を養子とし備中高松の城を讓り左衛門佐は程なく病死せり筑前守も不幸にして早世いたし嗣子なくして石川の家斷絶し幕下の面々是を歎き高松の城へ集會し談合せしめ左衛門佐心入を以て筑前守を養子とし其好みもあれは鈴木方へ相談し渠か差圖を以て一族の内を談し申請石川の家相續然るへしと一決し各退出せり其時清水心底には由緒もなき鈴木か一族を申請頭に仰くへき事心外の至也我等高松の城主になるへきと存しけれとも長谷川事も此望みありと聞ゆれはいかゝすへきやと工夫しける處に清水高松の城を望みけるのよし長谷川承り我等てそ上座と云身躰宜しけれは城主たるへきに傍若無人の至也調儀を以て清水を討果すへきと内々企けるを又清水承り永祿八年八月朔日幕下の面々高松の城へ會合し其席にて長左衛門宗治遮て長谷川を手討にし諸將に向て云けるは自今以後高松の城主は某なり歸服の面々は人質を玉はるへし若領掌なき人々は其意に任すへしと云各一同に歸服せし通誓紙いたし人質を出すに依て長左衛門石川の遺跡を續て永祿八年より備中半國の旗頭高松の城主となる鈴木秋山兩人は宗治高松の城主となりて後恨みを含み不和に成たり其後清水事幕下の各を同道し隆景公へ罷出毛利家の御附屬になり御奉公致すへくの旨申上悴源三郎景治を人質として進上いたしけり

清水長左衛門宗治方へ信長公より誓紙を以て被招事

一羽柴秀吉事天正十年三月備前岡山着陣の翌日蜂須賀彦右衛門家政黒田官兵衛存高兩人を高松の城へ差越れ清水方よりも家臣兩人差出しけれは信長公の誓紙並秀吉の添狀を相渡し信長公仰の旨述け

るは清水長左衞門宗治事文武兩道の達人の段其聞えあり此度羽柴筑前守秀吉と談し西國の先手を致し軍忠を抽するに於ては備中備後兩國を宛行へくと也其段長左衞門へ申聞せ御請には信長公の御誓紙を下され有かたくなれとも數年毛利家に屬し當國所々の境目を預り重恩淺からす然るに今更逆臣の身と成信長公の御味方いたし西國の先手致さん事屍の上の耻辱なり縱ひ西國拜領し榮花にはこりたりとも何の面目有て樂とせんや古語にも貞女兩夫に見えす賢臣二君に仕へすといへり又或歌に

幾度も主の命に替るへし二心てそなかきはちなれ

と詠せり愚癡蒙昧にやかやうの事耳にふれ膽にそみ一心に存し極め今更心底を改めん事中々存寄さる儀なりと返答せり兩使歸りて秀吉へ其通を達しける處に又兩使を以て云越れけるは宗治誠に義士の志最なり去なから時の變化に依て大身も小身となり小身も大身と成事古今其例少からす今信長公に一味せられたりとも屍の上の辱とは云かたし僅なる一城の主として兩國の大主となる事武德の顯るゝ所なりされは古語に曰天の與ふるを取すんは却て其咎を受時至て行すんは却て其殃に遇と云り是非御味方あれとなり宗治承り最前も云し如く毛利累年の懇意いふも餘りあり一を以て十を知といへは御賢察あるへし先年播州上月の城責の砌某は小早川手に屬し肝要の攻口に置れたり然る處に宇喜多直家計策を以て方角の侍に鈴木秋山と云兩人あり彼者ともに申含め宗治か在陣の留主を幸ひに悴才太郎を生捕て高松の城に籠なは宗治も終に信長公御味方すへしさあらは信長公より兩人へ莫大の恩賞あるやうに直家取成すへしの通り云けれは鈴木秋山領掌せしめ家人ともを高松の

城下へ遣し置ける處に悴才太郎（後源三郎景治と云）八歳の時城下の川遊ひに出けるをすかし取て高松の城に籠りたり留守居の者案の外出し拔れ無理に取返さんとすれい才太郎か一命危しいかゝすへくや力に及はすの通上月へ申越此段輝元公隆景公聞し召れ某への仰に其方責口は取分肝要の所なれとも早々高松へ歸り調略を以て才太郎を取返すへしと也有かたき仕合と辭退に及はす一族の内中島大炊助行秀を上月に殘し置其外一手の者共同道し高松へ歸りける途中より先達て云遣しけるは幕下の林三郎右衛門重眞と云者鈴木秋山と緣者なれは重眞を以て扱ひを延引すへし才太郎をこめて討果すへしと某も無二の覺悟を詰て云ける處に重眞色々取扱ひ和睦せしめ才太郎を返し鈴木秋山兩人下城し奥郡へ引取もへ早速又上月へ參り輝元公隆景公へ逐一申上けれは鈴木秋山を討果させられたりかやうの厚恩報ゆるも忠功とては相成す責て信長公の御味方に參らぬを以志とせし通申切兩使を差返しけり其後信長公の誓紙秀吉の添狀輝元公隆景公の高覽に入たり

羽柴秀吉高松の城を圍るゝ事

一天正十年三月廿九日秀吉は八幡山を本陣として毛利家持分の城々へ手遣ひさせられ同四月七日には備中の國鐵床山の上澁倉山へ秀吉馬を乘上られ已の剋より未の剋過まて見合られ極晩に本陣へ打入られたりかくてさし寄の城備中の内宮地山を取卷同四月十四日備前衆を以て稠しく攻られけるゆへ城主美乃少輔十郎並加番の内竹井惣左衛門直定懇望いたし城中の者一命助られなは城を明渡すへくの通相斷りけれは御分別遂られ備前衆宮地山の城をうけ取少輔十郎を始め城中の者下城せり又因州冠山の城を攻らるゝの處に

林三郎右衛門重眞加番鳥越左兵衛松田左門其外歴々防き戦といへとも城中不意に鐵炮の薬に火移り固屋悉く燒失せしめ此出火をみて諸勢一同に乗込鳥越松田を始め城兵過半討死せり林重眞も防戦し終に切腹せり打洩されたる者とも切拔備中高松の城へ籠りたり其中に林與九郎鳥越五兵衛兩人は高松の城にて林與三郎宗重片岡助兵衛治近か持口池の下と云處に籠り數日相働けり此助兵衛といふ者は宗治か家人にて働の時首二十餘級取て覺えある者也又高松より一里南に鴨の城と云平城あり本丸に桂民部大輔廣繁西の丸には上山兵庫助元泰東の丸には生石中務丞なり此生石事備中石川家の者なりしか石川家滅亡の後隆景公へ召抱られたり然る處に今度逆意を以て上方勢を生石か丸へ引込夜中に本丸へ云けるは近年隆景公へ馳走を遂けれとも御取立もなくさすれは羽柴殿御懇意淺からす今度柴羽秀吉公へ御奉公いたしなは一廉忠賞有へくの由仰下されけれは上方一味せり此間申談しける驗に民部大輔殿御一命別條なく相理り隆景公の御陣所へ送り届へし人質の儀御望次第に進すへし城をは早〻御明渡有へしと云懸たり民部親族桂右衛門景信承り櫓へ上り云けるは御方事此内上方へ内通のたん聞及ひ今更驚へきにあらす旁こそ先年石川家滅亡の時小早川殿へ懇望し奉公に參り身に應せさる知行を取今又上方へ現形のたん未練の至り言語に絶中々返答に及はすと云捨鐵炮を打懸させたり夜明てみれは秀長公の陣所一の宮より生石か丸へ人數打續きたり民部大輔常々火矢を用意せしめへ生石か丸へ火矢を三つ四つ打かけれは爰かしこ燒出るによつて固屋へ階を懸三四人上り消ける處を民部か三男に桂孫二郎と云者十六歳なりしか鐵炮にて二人打て落し火は其儘

惣固屋へ燒上りけるもへ生石か丸へ入はまりける敵とも崩出逃に付鴨の城より中間七八町ほと阻て丸山あり其山へ毛利家御人數出されけるを備前衆見及ひて引拂ひ民部兵庫も運を開きたり民部家人村上新五左衛門内藤七郎左衛門を始十二人討死せり民部籠城に火矢を嗜み置けるたん遠慮深き儀なりとて御褒美あり又一の宮の本願寺より出家二人堀際まて來りて是非とも城を渡され然るへし御一命ゝ助け置の通上方衆申され御使として兩僧參りたりとの儀なり出家の身として入らさる戯言なれは打殺すへしとて鐵炮を以て膝の上を打ぬき倒れけれは首を刎へしとゝけれは一人の僧達て侘言いたし別條なく又忍山鎌倉山の兩城へも敵取卷筈の由同五月朔日山下より告來るによつて其覺悟いたし莚をつり昇楯をかき持掛ける處に又山下の寺より出家一人鎌倉山の中ほとへ上りて云けるは宮地山の敵陣今朝未明に高松の城へ寄たり此兩城を攻む筈の處に夜中に樣子替りたるもへ知せけり又日幡の城の本丸には備前の上原右衛門大夫元祐在住せり二の丸には日幡六郎兵衛と云者罷在ける處に上原逆意いたし六郎兵衛にも秀吉の味方いたしけるやうにと進めれけとも同心せされは六郎兵衛を討果し上方へ現形せり元祐か親は上原豐持とて先年元就公備後御弓矢の時御用に立忠儀をしたる人なり御家中に親類なとも有之御家を離れさる人なるに依て今の右衛門大夫元祐事元清公元政公秀包公御一腹の御息女を妻に遣され能仕合なりされは元春公隆景公隆家同前に御用にたゝて叶はさる元祐なりける處に案外未練を構へ是非に及はさる心底なり御和平の後秀吉も不屆者とて御構ひなし然れとも播州賀古にて僅知行千石宛行はれ兩年過て死去なり日幡の城元來は日幡八

郎左衞門と云者の居城なり八郎左衞門事毛利家を背き備前へ參りける其跡へ上原を遣されたる六郎兵衞は八郎左衞門と同名なれとも素より日幡の二の丸にあり中嶋大炊助行秀か妹聟なる故別て忠義を盡しけり又高松の城には清水長左衞門宗治兄の月清其子左衞門尉行宗林與三郎宗重中嶋大炊助行秀荒木の一族湯淺新倉以下御本手よりは末近左衞門信賀小早川殿よりも歴々御加勢吉川殿よりは粟屋信濃守其外相添られ都合二千人清水か自分の人數並に一手衆ともに引合六千餘籠り又近郷の百姓とも五百人籠城せり彼等式奇特の志なれとも入さる儀也と云聞せけれとも清水か數年の厚恩忘れ難く由にて右の通なり輝元公も御先手吉川殿小早川殿兩將は岩崎へ御陣取なり猿掛岩崎の中間三里餘あり御分國諸勢都合六萬餘騎岩崎の庇山(ヒサシ)まて陣取なりされは天正十年四月廿七日秀吉八幡山より打おろし高松の上龍王寺に本陣を居高松の城を二重三重に取圍れたり高松の城は三方沼にて攻寄かたし城中より多人數出鐵炮せり合あり其後一戰に及ひ寄手打死數百人なり高松名城と云其上堅固なる仕組に仍て力責には成ましくとて水攻の工夫を以て同年五月七日蛙か鼻と云山へ秀吉陣を寄られ高松は平城なるに依て三里の間川筋に土手を築き河水をせき留水責にせられたり折ふし霖雨にて山々谷々より水落つとゐ城中へたゝえ往來も成かたく板なと取集め小船二艘てしらへ敵陣へ夜懸の働せり敵方には大船四五艘作りひとつにもやひ其上に勢樓を組上城の際まて責よせ熊手鍵を掛塀櫓を引崩しける處を城中よりも鎗にて突拂ひ爰を專度と戰ひて敵味方手負死人多し秀吉の責口ばんぎうと云城の手先は中嶋大炊助行秀荒木の一族の持口也池の下は備前衆の攻口なり是は

林與三郎宗重片岡助兵衛治近持口なり林與九郎鳥越五兵衛は冠山の城より切脫一所に籠りたり時に清水思ひけるはかやうに城中難儀に及ふ時は逆意の者出來敵を引入もやせんとて片岡助兵衛か組の足輕四五人召連自身夜廻りしける處に或夜八幡山の麓に人の形のやう成者のみえ不審しけるに案のとく一人游上り頭に付たる帷子を取て着し脇差をさし身繕ひせり足輕共にあれ召連參れとあれは足輕行て相尋ねけれは御本陣よりの御使とて同道いたし則清水相對しける處に某は宇喜多小二郎と云者なりと假名を名のり竹の筒より御書を出し清水宗治に渡せり其御書に曰永々籠城辛劬の段筆紙に盡しかたく後詰として出馬せしかとも上方勢大軍取圍に依て加勢存する樣に成かたく此上は早く上方へ降參せしめ城中の衆命を助くへしとの御紙面なり宗治御請に信長公へ降參の儀存寄さる所なり素より逆意を存する心底ならは最初より上方へ一味すへし憚なから是非なき御意也と書て小二郎に相渡しけれは請取御本陣へ歸りたり

清水長左衛門宗治切腹の事

一備中高松の城中水湛へ難儀の躰を秀吉見給ひ安國寺の西堂を呼れけれは秀吉の本陣へ西堂參りたり秀吉相對あつて云れけるは御自分を乞請る事別の儀ならす毛利家は取分古き家也變化ある時は笑止に存する間和平の儀申談し度なり御領國の內因作兩州は爭ひの國なれは云まてもなく殘り八ヶ國の內五ヶ國差上られ猶又清水長左衛門宗治に切腹申付られなは以來迄の儀我等請合信長公へ宜しく計ふへし此段輝元元春隆景へ能々達せらるへくの通仰聞られたり西堂歸り御三殿へ右の赴申上けれとも中々御納得なし然處に天

正十年六月二日の朝明智日向守光秀逆意を企て本能寺におゐて信長公を討奉り御嫡子誠之助信忠公をは二條の御所にて同日に討果したり此赴を長谷川宗仁より早飛脚を以て秀吉へ注進せり其書簡を三日の晝時秀吉披見し玉ひ其儘懐中し飛脚直に御尋の儀有之とて御前近く召寄られ有無ともなく手討也引直し安國寺を呼寄られ毛利家と彌和平いたし度我等事此度何たる手柄もなければ清水宗治に切腹申付られなは夫をひとつの功にいたし度八ヶ國の事は只今の通相違有ましく也以來までの儀堅誓約すへし此旨三將分別致されけるやう御自分達て申さるへし信長公も一兩日中に出馬のよしなり姫路迄着なれは何を存ても相成す事なり其内急度談らるへきの通西堂承り急き罷歸委細申上ける處に輝元公聞し召れ和平の儀はさやうも相成へし清水へ切腹致させける儀は分國に替ても相成すの通仰切れ又秀吉の陣所へ西堂參り御返答云けれは幾度も御自分異見尤なりと秀吉云れける處に蜂須賀彦右衛門家政生駒雅樂助道兩人西堂を勝手へ呼立内々云けるは是非とも御異見仰上られて御和平尤なり其許御分國の大身衆信長公よりの御誓紙頂戴にて皆領掌の御請致されたり其證據には元春隆景御兄弟同前の上原殿頓に上方一味いたされたりとその證文をみせけれは西堂も驚入又輝元公へ申上たりとても同し御返事なるへし此趣を城中へ參り長左衛門宗治に有の儘に云聞すへしとて小船を借急き城へ參り樣子具に物語けれは長左衛門承りさては秀吉和談の事申さるゝ哉御分國の儀まて相濟たれとも某に切腹仰付られける事を御厭ひあつて御和平相成すの由難有御心入なり御家の安危も此時に極りたりかやうの節抛一命後代に名を殘すこそ武士たる者の願ふ所なれ御家

に替られても某を捨られすとの御規定のたん悴家の面目何事か之に如んや片時も猶豫すへからす早々秀吉へ御達し給るへし御本陣へは先御沙汰なき樣に憑入たり某切腹し果たる以後御披露あるへし猶秀吉へは委細書翰を捧け申定へしとて西堂を返しけりさて末近左衞門尉信賀其外頭分の面々を呼集め右の趣を達し明四日晝時切腹すへきと云けれは各一同に云けれは御自分一人御切腹の儀尤なれとも各儀切腹に及はす御本陣へ歸り何の面目あつて傍輩の衆に相對すへしや物頭として籠城せし者はいつれも切腹すへしといへは宗治聞て各申さるゝ處尤なれとも毛利家此時節大事なれは皆々は重て御用に立るへし此度は某一人にて相濟事也去なから御檢使にてあれは末近左衞門尉信賀殿は同道すへしと云ける處に舍兄清水月清我等も切腹いたすへし其子細は某事數年武者修行をして回國せしめ頃日在京せし處に弟なりける清水左衞門宗治高松に籠城せしめ秀吉數萬の人數を引請るの由承り罷下り一所に籠城し秀吉の御聞にも達し其外敵陣の歷々存する處顯然たりゑかるに長左衞門か切腹を見て月清殘るへき道理なし俱に切腹一命を捨城中の衆命を助けんと思ふなり此旨秀吉へ達すへしと長左衞門へ云ける處に城中の各承り月清の心底尤にてはあれとも此儀は御無用の通達て異見しける處に某遙々罷下り籠城したる志を空しくすへきや努々此度の死を遁るへき所に非すと申切一向承引せす其後秀吉の御本陣へ長左衞門宗治より申出たる書翰に曰

謹而奉述愚意候

抑當地永々御在陣諸卒之勞力乍恐奉察候然者當城極運之儀彌近奉覺候清水兄弟末近左衞門尉信賀三人之者代衆命可致切腹之條

被垂御憐愍籠城之輩被施於寛仁之君德悉於御助者忝可奉存候依
回章明四日之日中可及切腹候將又小船一艘並美酒佳肴聊預恩賜
候者且忘籠城之辛苦且可散老兵之疲勞候此旨御披露所仰候恐々
謹言

天正十年六月三日　清水長左衛門尉宗治判

蜂須賀彦右衛門殿
杉原七郎左衛門殿

兩人返章

御狀の赴筑前守え令相達之處に各三人代衆命籠城之諸人可有御助の結構一入被相感候則可應御望旨候然者小船一艘酒肴十荷並上林極上三袋令進入候明日檢使差出候樣にと御使者被申候被仰越候外縱雖爲長男枝連切腹有之間敷旨被申候恐惶謹言

六月三日　蜂須賀彦右衛門家政判
杉原七郎左衛門家次判

清水長左衛門尉殿

回鯉

清水宗治か家臣白井與三左衛門治嘉最期の事

一清水長左衛門宗治か家臣白井與三左衛門治嘉と云勇士あり高松大手の櫓を預り去四月廿七日の合戰に深手負けれとも其身堅固なり六月三日の晩本丸へ使を出し直に申上度子細あり御出下されける樣にと申によつて早速宗治參りけれは與三左衛門太悅いたし御切腹明日に相極りたりと承り某試に切腹せりいかにも安き物なりと て腹卷を除て是御覽あれと申せは宗治見けれは腹十文字にかき切たり宗治驚き云けるはさても殘り多き事也其方常々忠心類ひなけ

れは妻子の行衛を賴み置へしと存しける處に某に先立けるよとて落涙せり恐なから御介錯をと望みけるゆへ首を討て本丸へ歸りたり

清水長左衛門宗治最期の事

一清水長左衛門宗治事備中高松の城中萬端仕置の事注文に記し妻子の向後戀に申置さて暇乞の一献を始め次第〳〵に杯を回らせり嫡子源三郎は人質として三原へ進し置けるに依て末期の歌三首を殘し成人の後此歌の心をさとり忠勤を勵むへしと書置たり其歌に

恩を知り慈悲正直に願ひなく辛苦氣盡し天に任せよ

朝起や上意算用武具普請入をつかひて事を敬しめ

談合や公事と書狀と威儀法度酒と女に心みたすな

六月三日　清水長左衛門尉宗治判

○一清宗列ありに鎖心とり

源三郎殿　參

右之通數々申置なと相認其後童に鬚を拔せ居ける處へ幕下衆並吉田新庄三原よりの御加勢衆御暇乞に參り此躰を見てかゝる折から入さる男振の御作りやうかなと云けれは宗治打笑ひさないわれそ某首は信長公實撿有へし其儘にて髭を置なは籠城の心遣に忘却したりと見る人に謗られんも口惜けれはなりと挨拶せりされは天正十年六月四日巳の刻長左衛門衣裳を改め小船に乘蛙か鼻と云處まて漕出せり西は味方の大將輝元公吉川殿小早川殿御陣也東は敵の大將羽柴秀吉の陣所也兩陣の間に船を留めける時秀吉より檢使堀尾茂助吉晴小船に乘て清水長左衛門に相對せしめ秀吉よりの口上を述其後茂助方よりとて美酒佳肴差出しけれは宗治太悅せしめ筑

前守殿へ御禮の儀茂助殿賴存するの由を云て末期の盃を廻らし長左衛門誓願寺の曲舞を謠ひ出せは舍兄月清末近左衛門尉小者の七郎四郎同音に謠ひ納め次第〳〵に切腹せり介錯は幸市祐と云宗治か家人なり此時宗治四十六歳辭世の歌に

浮世をは今こそわたれ武士の名を高松の苔に殘して

宗治其外切腹せし者ともの首を何れも首桶に入假名を書付て茂助に渡之死骸をは城中へ取歸り煙となして後市祐も切腹せり此市祐は清水長左衛門か家中にても數度鎗を以て名を得たる手柄者なり

輝元公秀吉公御和平の事

一清水長左衛門尉宗治最期の躰を見聞せし者古今無雙の義士なりとて敵味方ともに褒美せり右の赴安國寺惠瓊和尙御本陣へ出申上られたり輝元公吉川殿小早川殿御一所にて聞し召れ長左衛門事案外なる仕合是非に及はす無類の忠心也不便に思し召るゝとの御意にて何れも御落涙なされ惜るゝ事限りなし然りといへともかく成も上は御和平の評議急度御談合成るへしとて秀吉の本陣へ西堂罷出双方御誓紙の上相濟けり御國分の事因幡美作は爭ひの國なれは沙汰に及はす伯州の南條事上方御味方に成ける間矢走川を限り備中は清水切腹の上は河邊川を境にして御上表あるへし殘て安藝備後周防長門石見出雲隱岐備中半國伯耆半國合せて一ヶ國都合八ヶ國御領せらるへきに相定り秀吉御判形御筆本は西堂見屆にて御血判させられたり其誓紙に曰

起請文之事

一被對公儀御身上御理之儀我等請取申候條聊以不可疎略存事

一雖不及申候輝元元春隆景深重不存如在我等掛進退見放申間敷事

一如此申談候上者表裏拔公事不可有之事
右之條々若僞於有之者
日本國中大小神祇殊八幡大菩薩愛宕白山摩利支尊天別而氏神御罰
深厚可罷蒙者也仍起請文如件

天正十年六月四日　羽柴筑前守秀吉判

輝元
吉川駿河守殿
小早川左衞門佐殿

信長公御切腹の趣秀吉より知せの事

一天正十年六月四日高松籠城の者とも下城せしかは秀吉城を請取せ杉原七郎左衞門家次を籠置れたり其後諸將を集め談合には我等事急度當城を引はらひ上洛せしめ明智日向守光秀を打果すへしされは諸陣に煙を立在陣の躰を見せ引取へくや又輝元へ使者を以て信長公御切腹の樣子眞直に申達し引退へくやいかゝ存られけるやと宣へは蜂須賀彦右衞門家政進み出云けるは御和談相濟互に御誓紙の上出拔御退陣いかゝ有へくや中國衆は律儀に有ければ誓紙の違變あるましくといへは此儀秀吉氣に相て其方云けるやうに其首尾然るへしさらは彦右衞門參りて輝元並兩川へ口上申達すへくの儀もへ彦右衞門承り供の揃十五六人素肌にて召連輝元の御陣所へ參り云入けれは先兩川殿御出合也秀吉申越れけるは去る二日惟任日向守逆意を企信長公御父子を京都にて弑し奉りけるもへ某事上洛せしめ主君の敵を誅戮すへき覺悟なり此間申談ける誓約の通御相違なきに於ては本望たるへし若又御違變有へき御心底ならは御返答次第御意得へくとの儀なり兩川殿聞し召れ輝元公に申聞せ其上

御返詞すへしとて右の趣輝元公へ仰上られ早速御一門衆御家老中召出され御談合あり各存寄ある處に隆景公仰られけるは近年秀吉弓矢の取やうをとくとみけるに大量にて智謀ある勇將なり以來は天下の仕置もすへし此度契約を違變するに於ては秀吉遺恨骨髓に徹すへしさある時は向後當家の滅亡疑ひなし今いよ〳〵和睦を厚くして信長公の死を弔ひ玉はゝ秀吉太慶たるへしと仰られけれは輝元公尤と御同意にて御返答には今月二日惟任逆意に依て信長公御父子御死去の段貴殿御心底察し入たり急度義戰を遂らるへくため御上洛の由御用もあらは人數いかほと成とも加勢致すへくの通仰ありて彦右衞門を差返されさつそく内藤越後守良正を御悔の御使として秀吉陣所へ差越れける處に秀吉太悅あつて越後守に對面し相當の御返答にて御加勢の儀添存したり去なから人數は入されとも鐵炮五百挺弓百挺旗三十本御加勢賴存するの通にて越後守を差返されたり則同月六日には秀吉高松を出馬有て同八日姫路に着城し玉ふ也毛利家にも岩崎の御陣を猿掛へ御打入ある處に其途中にて信長公御父子滅亡の到來あり此注進せし者は原平内とて雲州牢人久しく杉原盛重に罷居其後都へ上り明智日向守光秀家中に罷在たり此飛脚も天正十年六月二日に京都出足しけれとも船中日和あしく漸御陰へ上り陸を參りけるゆへ延引せし由なり

清水宗治か嫡子源三郎か事

一清水宗治か妻子は備中の河邊まて退きたり清水源三郎も隆景公より御暇下され河邊へ參り一所に罷居たり先當分の御心付として百人扶持隆景公より下されたり其後猿掛の城へ召出され輝元公御對面成れ父長左衞門忠死比類なく思し召るゝの通御意にて御感狀下

され其上名作の御腰物御脇差拜領させられ居城並領地の儀は隆景を以て仰出さるゝ〳〵の旨御意なされ有かたく仕合にて罷歸りたり其御感狀に

今度羽柴筑前守押下備中高松の城取詰候處父長左衞門以無二之覺悟雖數日相抱候不叶令自害城中之者助置候事都鄙之名譽敵味方共驚耳目候古今之武勇當家之面目忠功無比類之段連々以不可有忘却候仍太刀刀令進候委細隆景可被申候恐々謹言

天正十年六月日　　輝元　御判

清水源三郎殿

清水一手の者次第〳〵に召出され籠城中苦勞のたん神妙なり領知の儀は隆景を以て仰出さるへくの通御意なされ夫々に應し御褒美品々拜領させられたり

羽柴秀吉公へ諸國より證人を差出す事

一秀吉公山崎合戰に勝利を得られ明智日向守光秀を討果さるゝに付輝元公より御祝詞として安國寺惠瓊を御使にて蜂須賀彦右衞門殿まて御書差上られ御返書もあり尤吉川殿小早川殿よりも御狀にて御祝詞仰られたり秀吉公天下を御存分に任せらるゝに付諸國より秀吉公へ證人差出され夫故天正十一年證人として吉川殿より宮庄又次郎經言公小早川殿よりは毛利四郎元綱公御上洛なり元綱公は十七歳經言公は廿三歳の御時也桂民部大輔廣繁秀元公へ御付置れけるを御雇にて四郎殿へ御付成れ別て御懇の御取持にて經言公は藏人に名替仰付られ元綱公は藤四郎に仰付られたり其上御諱の字を下され秀包と改られ上方に御逗留なりされは天正十一年越前の柴田勝家と秀吉公御取相になり志津ヶ嶽の一戰に勝家打負て越前

悉く秀吉公の御手に入たり其砌秀吉公方にて鎗しける衆は福島市松（後左衛門大夫と號）加藤虎之助清正（後主計頭と號）加藤孫六（後左馬助と號）平野權平（後遠江守と號）脇坂甚内安治（後中務大輔と號）粕谷助右衛門直充（後内膳と號）片桐助作直盛（後東市正と號）此七人手柄せり是を世に七本鎗の衆と云也此外石川兵助は討死せり又天正十二年織田源五信雄と秀吉公御半惡敷御取相になり信雄より家康公を御頼に付御領掌有て家康公尾州小牧山へ御出張御在陣成れけり秀吉公も御人數を揃へらるへきため江州坂本へ御出馬の砌大坂より藤四郡秀包公御暇乞として御出仕の處に桂民部廣繁を召出され秀吉公の御意に藤四郎儀の事彼是無支度なるへきなれとも尾州小牧へ御同道有度の由藤四郎は若年の儀なから民部供せしめへ右の趣仰聞られたり民部謹て承り此段藝州へ相伺はては叶はぬ儀なれとも遠路と云高命背きかたきに依て早速御請いたし藤四郎若年の處御心入有かたく存し奉るへしと云けれは秀吉公中々御祝着の由にて宿々下々に至るまて御念入られ秀吉公御下知を以て手堅仰付られける故萬事首尾よく御陣中御届け成れ御打納の時も又秀吉公の御前へ藤四郎殿並民部をも召出され今度尾州御供の儀俄に仰出されける處に一應に請をし供致されける段御祝着に思し召れたり御暇遣されける間御先へ上京有へし藤四郎若年なれは上方におゐて用事も有へし是を以て調へ進すへしとて此比甲斐の國より納たる碁石金三百兩遣されたり一兩充丸く吹たる金子也されは尾州小牧に於て家康と秀吉御取相大合戰あり秀吉公の方にて池田信輝入道鎗下にて討死せり家康公の方にて永井左近大夫直勝討捕れたり秀吉公濃州犬山の城へ御打納なり同州竹か鼻と云城織田源五殿居られけるに依て秀吉公御取蒐稠しく攻られける處に

源五殿懇望に付て御分別遂られ城を御請取せ源五信雄をは京都へ御同道あり其後家康公と秀吉公御和談相調ひ天下は秀吉公御存知にて聚樂におはしまし諸大名衆在洛にて天下泰平の御代となれり仍て秀吉公の仰に此以後吉川小早川兩家よりは證人に及はす輝元證人として藤四郎秀包一人にて相澄ける通仰出されたり

豫州金子か城被攻崩事

一豫州河野彈正少弼通直の幕下に金子左近と云城主あり現形して土州の長曾我部元親に屬しけり此比元親は土佐阿波讃岐三ヶ國を領するに依て通直一分にては金子を退治成かたく存し毛利家へ度々の御無心なれとも御加勢頼み奉るの由申承り則御領掌成れ秀吉公へ仰窺れけれは四國御退治有へくと思し召けれる折からなれは上方よりも御人數差向られける間早々御渡海有へくの旨に付天正十二年六月の初輝元公は備後の三原まて御出張豫州へは隆景公元長公二萬餘騎にて御渡海なり秀吉公よりも檢使として黑田官兵衛孝高を差越れたり同年六月二日黑川太郎か居城へ押寄取圍るゝの處に金子方より騎馬三十騎許にて物見をかけ毛利家の陣所近く働きけるゆへ隆景公御家人百騎許出向ひけれは物見の者とも早速引退きけり其後惣勢城を取卷き仕寄を付稠しく責ける處に黑川叶はすして御侘言せしに依て御分別の上城を明渡し土州へ引退きたり城をは御請取せ吉川殿より香川左衛門尉光景を籠置れたり同年六月七日金子か城へ取掛りける剋城中より三百人許突て出防戰す吉川殿より今田中務忠久香川兵部春景松岡安左衛門其外切て掛り悉く城中へ追入たり同九日益田越中守元祥熊谷豐前守を先として各金子か城に仕寄を付同十日惣勢城攻と相極ける處に九日の夜中城兵

突て出益田元祥熊谷元直か軍兵請留仕拂けるゆへ三百許山傳ひに土州へ欠落せしめたり此時益田熊谷か兵とも城へ乗けれは惣勢も續ひて乗込たり御本手にては井上五郎右衛門元重別して働き敵方の宇都宮次郎兵衛高松藤八兩人を討取粉骨を盡しけり依て輝元公より元重に對し御感狀下されけり小早川殿衆には眞田孫兵衛蒙掛(モンカケ)彌左衛門景成其外歴々分捕高名せり吉川殿衆には松岡安左衛門朝枝信濃守桂五郎兵衛山縣源右衛門井上又左衛門其外分捕高名せり城主金子をは三村紀伊守親成か家人討取けり惣して諸手へ討取首數三百餘級なり同十六日には新井の柴尾へ兩川殿御陣を替られける處に石川帆柱兩城とともに明退けるゆへ此所に御逗留にて上方衆を御待成れたり羽柴秀吉公同秀次公は其勢六萬餘騎にて阿波の國へ趣き長曾我部土佐守元親か居城和氣の城を攻らるゝの處に土佐守叶はすして降參せり夫より秀吉公兵を進めて元親か弟親安か居城一の宮の城を攻らるゝの處に親安と降參の侘言いたし御分別遂られ夫より桑名左衛門か籠りける豫州木津の城へ寄られたり一夕風烈しき事あり其紛れに左衛門城を出て土州へ逃退たり又仙石權兵衛に人數を付讃州へ向られける處に八嶋の城へ押寄即時乗取けるゆへ秀吉公秀次公兩將とともに佛殿と云所へ御陣替なり兩川殿も同所へ御陣替にて秀吉公へ御相對の處に今度豫州表御退治軍忠淺からすのたん御感悦にて兩將大坂へ御皈陣なり仍て兩川殿も御歸帆成れたり

秀吉公より清水源三郎へ御意の事

一豫州より御歸陣以後天正十三年十月小早川隆景公吉川元長公御同道にて攝州大坂へ御出仕成れける處に秀吉公御喜悦大形ならす樣

喜多郡に田郡喜多一郡

々御馳走仰付られ御下向の時は陸を御下りに付秀吉公より黒田官兵衛孝高を御付成れたりされは備中の河邊にて官兵衛殿清水源三郎か宿所へ立寄れ源三郎へ云渡さるゝ秀吉公の御諚には清水長左衛門事古今無双の侍なり實子あるよし聞し召れ早々上方へ上らは領知宛行はるへくの旨源三郎御請には有かたく御意なれとも父長左衛門事一命を捨毛利家へ仕へけれは私事も輝元に奉公の志し今更變しかたしといへは小早川殿吉川殿黒田殿何れも尤なる申樣とて御感成れしとなり

隆景公豫州御拜領に付清水源三郎を被召連事

一此比隆景公御軍功に依て伊豫の國御拜領成れけるもへ清水源三郎召連られ喜多郡の内にて三百貫遣され其後隆景公御國替にて筑前の國を御拜領の時も源三郎を召連られ御加増遣されたりかくて隆景公高麗御渡海の御供にも召連られ都にて合戰の時井上五郎兵衛景貞一所に軍忠を遂るによつて粟屋四郎兵衛景雄井上五郎兵衛景貞同前に源三郎景治にも御感狀遣されたり金吾殿御代に成ても御奉公致しけるに付山口玄蕃頭より秀秋公へ申上けるは清水事は親以來忠勤の侍にて源三郎景治へ度々秀吉公御意の次第もあれは御加増遣され然るへしといへは二千石御加増遣されたり其後金吾殿御小身に成せられ越前の國へ御國替の時御暇をこひ浪人に成たり然る處に石田治部少輔三成安國寺を以て佐和山へ參りなは領知七千石に三百人扶持遣すへくの由なれとも源三郎參らす又慶長の比大津の城攻の時井上五郎兵衛景貞と申談し一番乘せり其節立花左近殿大津の城を責手にて一番乘の次第見屆られ輝元公へ御取成あり木津御屋敷へ清水源三郎景治召出され今度處々にて忠節を盡し

ける間追て御感狀遣さるへし先國元へ下り妻子の作舞いたしけるやうにと御意成くたされける處に備中水島にて西國へ下りける飛脚船の者の云けるは毛利殿御身上何とやらん六かしきやうに風聞承りしと云けるゆへ心許なく存し源三郎景治水島より引返し又大坂へ上り右の段申上けれは福原越後守廣俊堅田大和守元慶兩人御廣間へ出合れ相對の上則御前へ召出れ父長左衞門宗治以來忠心の至神妙なり此度の志衆に抽たりと御意成れ御手自兼光の御腰物拜領させられたり其後井伊兵部少輔康政へ輝元公御出の時も御人指にて御供に召連られ頓て御暇下りたり源三郎事五郎左衞門に改名し後には美作守に受領仰付られたり又慶長五年豫州松山正木の城主加藤左馬頭逆意に付輝元向ひて退治有へくの旨秀賴公より御下知に依て渡海の御人數村上掃部助元吉宍戸善左衞門尉永恒其外歴々差越れたり豫州着岸の上城の樣躰見聞せしひるの處に同年九月十七日の曉に城兵夜討に出るに依て毛利家の人數かけ合せ防戰せしめ敵味方入亂れ目を驚したる戰なれとも多勢に無勢叶はすして村上元吉曾禰高房兩人討死し御用に立けり仍て家族の面々に御感狀下され今に有之此外歴々手負死人有しとなり

温故私記卷第十六 大尾

秀吉公九州御退治並豊前小倉合戦の事

一天正十四年秀吉公九州御退治の事思し召立れ御先手に毛利家を御頼み成るゝの通仰出され輝元公より松山源次兵衛元忠を大將にて桂兵部少輔元親三刀屋彈正左衛門福間彦右衛門元明其外歴々差添られ人數三千餘騎赤間關を渡海して門司の城に楯籠れり然る處に高橋主膳統增(ムネ)か端城小倉より足輕を出し鐵炮の追合いたすに付源次兵衛は小倉の城を攻取へしと存する折ふし稲津見羽右衛門といふ者五百餘騎にて門司の近所へ押寄たり源次兵衛是をみて小倉の城兵半分は出へし此勢を討捕なは籠城は成ましくなりあれ討とれと下知をなし三千餘騎の軍兵を引立突掛る處に小倉の城より二千許いて羽右衛門か勢とひとつに成て戰へとも小倉勢を突立追崩す

處に秋月三郎統勝一千餘の人數にて加勢し横より打に依て門司方忽ち突立られ既に危く見えけるゐへ福間彦右衛門元明取て返し十文字の鎗を以て敵數多かけ倒し其身もその場にて討死せり桂兵部元親三刀屋彈正久扶此躰を見て爰を退ては武士たる者の耻辱なり一足も引まじくと云合せ下敷て扣へける處に小倉勢は勝に乘て切て蒐る桂兵部か備にて請留相戰ふといへとも敵多勢なれは終に兵部も討死し赤川又左衛門元正兄弟も戰ひ勞れて討死し其外兵部一手の衆十三人討死せり三刀屋か家臣是を見て桂殿早討死し玉ひたり早々御蒐りあれと諫めけれは彈正久扶聞て蒐るも引も時の見合なり勝に乘て來る敵に掛ると云法はなし我等か家中の者は一人も掛るへからす皆下敷て其場を去す討死すへしと下知をなして居る所に案のとく競來りて突掛る三刀屋請留て合戰すといへとも多勢に無勢相叶はす家人共に十七人同し枕に討死す三刀屋少しも騷かす鎗を取てまつ處に小倉勢も進み得す次第〳〵に引退くに依て三刀屋久扶十死を免れて門司の城へそ引納ける源次兵衛は高橋に打負是非なく存するの處に備中より三村紀伊守親成下りけるゐへ三刀屋も三村も談合せしめ其後七曲りと云所に伏兵を置源次兵衛は城兵二千餘人を引卒し此方より小倉の城へ押よせり高橋秋月是を見て今日は一人も殘すまじとて勇み進んて打てかゝる源次兵衛少々矢軍して引退て高橋秋月競ひ掛る處を思ふ圖に引うけ源次兵衛取て返す三刀屋三村兩將の伏兵七百餘人一時に起て切てかゝる高橋秋月か軍兵前後の敵を防き兼立足に成て引退く源次兵衛か軍兵追蒐敵百人討取勝利を得たり其後元春公隆景公元長公經言公御分國の人數三萬餘人一同に小倉へ御渡海なり秀吉公より檢使黑田官

兵衛孝高也輝元公は長府まて御出成れたり小倉の城兵兩川殿御渡海を聞て城を明香春か嶽へつほみけるゆへ黑田高孝は小倉の城へ入替り吉川殿小早川殿は牛房原に陣を居られたり其後隆景公元長公經言公は小倉へ御渡海なり元春公は腫物御煩ひゆへ小倉に御在留成れけり此比秀吉公より寒氣の時分御軍勞御見舞として森勘八毛利兵橘兩人を差下され九州御退治いよ〳〵賴み思し召るゝの旨輝元公兩川殿へ御朱印を成下されたり

豐前の國宇留津の城を攻崩さるゝ事

一同年豐前宇留津の城に賀來與次郎と云者居たり先此城を攻崩さるへしと黑田孝高と隆景公元長公御談合極りたり黑田殿へ御加勢として御本手より宍戸備前守元續を一萬餘騎にて差添られ其外には宗像長野を御差添なりいつれも一同に松山の城を御出馬有て宇留津へ押寄られたり城の南は黑田殿北は小早川殿西は吉川殿御請取にて三方より仕寄を付て攻らるゝの處に黑田の手より指物を拔て城中へ投入れは敵是を取て走り廻りけるを諸手の陣より見付黑田殿の手より早乘入たると云も果さす我先にと攻入んとせしかは城中より弓鐵炮を討出すに依て眞先に進んたる牛尾大藏左衛門元貞鐵炮に中り討死す是をも顧みす諸手より乘こみ城中に火をはなつ賀來與次郎か叔父に賀來源助とて大剛の者あり名乘掛切て出る吉川殿家中境與次郎渡り合相戰ふ處に境手を負叶はすして引退く續て香川兵部春景向つて切結ふ香川打つけたる太刀を源助請はつし手を負てひるむ處を香川押へて首をとる備前守元續は城へ蒐入鎗を以て自身高名せられたり宍戸殿内の深瀨次郎兵衛忠良末兼孫兵衛家明中所源七郎久秋此三人も續ひて城へ入組打の高名せり其

外同家中にて淺原備後守渡邊壹岐守板屋肥後守近定寺下市助深瀬か家人中原太郎左衛門或は組打の高名し或は鎗下の高名あり此外にも歴々手にあひ宍戸殿手へ討取首二百餘級なり中にも勢一四郎兵衛中所掃部助元信櫻井菅田なと云者討死せり益田越中守元祥は城中より敵の出へき處を見はからひて待處に案のとく敵切て出けるゑへ越中守自身鎗を合せ敵を討取て高名せられたり益田家中にも歴々手柄あり又柳澤新右衛門景祐兒玉小次郎元兼兒玉筑後守元共山田吉兵衛元信村上又右衛門就常波多野源兵衛元信福間市祐佐竹三郎右衛門宇多田善助佐藤惣右衛門小田助九郎等敵を討取て高名せり吉川殿衆には今田中務忠久粟屋彦右衛門元忠佐々木豐前守横道權之允小野太郎右衛門新見右衛門其外高名せり小早川殿衆には井上五郎兵衛景貞粟屋四郎兵衛景雄裳掛彌左衛門景茂其外歴々高名せり城主與次郎をは吉川殿家中井上左馬允討取たり今度諸手へ討取首數一千餘級生捕男女百人餘あり見てらしめのために生捕をは悉く張付に仰付られたりされは輝元公御歸帆の後秀吉公より藝州吉田へ黑田官兵衛孝高を差下され今度の御陣中御馳走の故九州異儀なく御退治御滿足に思し召るゝの旨御禮也且又宍戸備前守一番に城へ蒐入自身働の段上聞に達し御感の御意の通を輝元公へ官兵衛殿相達られたり

豐前の國香春の城を攻崩さるゝ事

一高橋秋月かつはみける香春か嶽を攻らるへしと評定極り惣軍押寄取圍みけり此城に一の嶽二の嶽三の嶽といひて山頭三つあり其内三の嶽を吉川殿人數を以て攻取へくの旨隆景公仰渡されたり元長公は御親父元春公豐前にて御死去に付彼地におはしませり藏人經

言公は御留守の御仕置として藝州新庄へ御上りに付吉川の人數には下知すへき大將なし殊に三の嶽は嶮岨なる山なりいかゝすへきやと香川兵部春景粟屋彦右衛門元忠なと存しるけゐへ御幕下益田越中守佐波越後守興連宍戸五郎兵衛政慶を招き内談せし處に隆景公の仰なれは御理りも申されましく元長公經言公も當地に御居合なき段も御存しにて仰掛られたる事なれは各をはしめ吉川勢はと〳〵く三の嶽を枕にして討死より外有ましくと内談を極め夜に入三の嶽へ責上りてみれは箒火焚捨敵一人も居すされとも萱深き山なれは伏兵有へし各用心しける處に案のとく敵六七十人はと鐵炮を打立たり香川兵部か家人三宅源之允手を負祖式掃部か家人は鐵炮に中り果たり味方よりも鐵炮を揃へ互にせり合ける處に香川粟屋二宮古志なと聲を揚て突て掛れは敵悉く逃失難なく三の嶽を乘取たり其後二の嶽の間に土手を築き柵を振三吉新兵衛隆信を置せられたりかくて惣勢透まなく取卷猶付城を築き湯佐渡守家綱を差置れたり仕寄の番は各番にして勤られけり毛利七郎兵衛元康公の番の時夜中寒風烈しくさわかしき折節城中より突て出元康公の軍兵と相戰ふ夫より湯佐渡守家綱か付城へ切て蒐りける處に佐渡守鐵炮を以て打立けれは叶はすして引退くを入江九兵衛尉尚定追蒐敵三人討捕粉骨を盡しけるに仍て元長公より御感狀下され（此入江は津和野亀井家中にあり）其後惣勢押寄攻るによつて城主降參の御理り申に付て兩川殿御分別遂られ城をうけ取高橋事は下城せり

小早川隆景公吉川元長公闕國御拜領の事

一天正十五年秀吉公肥後の熊本に御在留の内九州の御仕置仰付られ肥後一國佐々陸奥守成政に遣され熊本の城に籠置れけり吉川元長

公へは筑後一國下さるゝの通仰出さるへくの處に俄に御煩御養生叶はす同年六月五日日向の都公置と云處にて卒去に付て其儀なくと也元長公御遺言にて某事實子なくの間弟藏人經言に一迹相續仰付られ下されけるやうにて輝元公へ仰置るゝに付則秀吉公の御聞に達られける處に元長公御遺言のとく仰出され經言公家督御禮仰上られたり秀吉公の御諚に元春元長父子ともに相果是非なき次第也藏人儀も忠勤を抽するに於ては國主に成遣さるへくの旨に付有かたくよし仰上られ御退出なり隆景公へ筑前一國筑後の内肥前の内相加へ七十萬石拜領仰付られ猶秀吉公御差圖にて立花の城に御在住成れたり小早川秀包公へは筑後の久留米の城を遣され城付六萬石也されは輝元公吉川經言公へ仰られけるは元春元良間もなく卒去一入御殘多思し召るへし然は御自分には諱の字を替られ然るへしとて毛利本家の廣を進られたり仍て經言を廣家に御あらため成れたり

豐前の國一揆並城井岩石落城の事

一天正十五年七月秀吉公筥崎を御出馬有て豐前の小倉へ御着成れ豐前八郡の内六郡を黑田勘解由孝高に拜領仰付られ殘て二郡を毛利壹岐守高次に拜領仰付られけり其後赤間關御着の上輝元公へ此度の御軍勞御感の上意にて御鎧一領遣されたり其時輝元公御膳差上られ樣々の御馳走なり御膳の上にて千鳥と云御太刀を獻せられ秀吉公御滿悅にて則其御太刀を指せられたり猶輝元公へ忠光の御刀之を遣されけり翌日關を御發馬なされ陸を御上り同月十四日大坂御歸城也然る處に此度黑田勘解由毛利壹岐守兩人拜領の領知の仕置申付るといへとも地下侍承引致さす一揆を起し城井岩石兩城へ

楯籠りけるゐへ黒田吉兵衛永正叔父兵庫助罷越れ輝元公よりも御加勢成れ内藤隆春を人數三百餘騎にて同年十月九日城井の城へ遣されたり城主は宇津宮彌三郎と云者也此城は取分嶮難の地にて寄手多勢たりといへとも一時に攻入事ならす敵味方火花を散して相戰ひ双方共に手負死人其數をしらす取分黒田吉兵衛内の弓頭に大野小辨正兼内藤隆春の内の鐵炮頭に勝間田彦六左衛門春豊眞先に蒐入兩人ともに討死せり其隙に吉兵衛をはしめ其外急難を遁れて引退く其後一揆の樣子秀吉公聞し召れ急に輝元廣家豊前へ渡海して黒田に力を添らるへくの旨仰下さるゝに依て輝元公二萬五千の人數にて同年十月廿一日御出馬なされ廣家公は雲伯石の人數一萬二千餘引卒し先陣に進み關の門を渡り先熊見越中守か籠りたる岩石の城を乘崩すへしとて同十月廿六日押蒐仕寄を付柵をゆひ敵一人も欠落せさるやうに稠しくせられける處に城兵切て出る廣家自身采幣を取て下知をなし數輩討取殘兵悉く追散されたり其剋城中へ森孫右衛門一番に乘込三村紀伊守も手勢二百餘騎にて續て乘込自身働き分捕せり夫より惣勢切入即時城を乘取たりかく岩石落城に付廣家小倉へ歸陣有て人馬の息を休め同十一月十二日又小倉を打立城井の城へ押寄萱切山に陣を取玉ふ黒田父子も二千餘騎にて吉川殿一所に陣を取れたり宇津宮は三千餘にて山下に打て出先足輕を以てあひしらひ寄手を呼引ける處に古志播摩守良綱湯佐渡守家綱都野三左衛門經良何れも先陣なれは一文字に切てかゝる城兵支へかねて引退く其後敵は小高き所を前にあて谷を後にして人數を二手にわけ備を立る廣家公敵の樣子を見玉ひ後陣の三澤攝津守爲虎か方へ粟屋彦右衛門元忠を以て仰越れけるは敵の備を見るに

寄手合戰はしめは後の山より人數をまはし跡を遮るへしとみえたり三澤一手は味方の軍に構はす敵の跡より掛り來るにおゐては防るへき通り下知をなし給ひ既に一戰に及はるへく覺悟の處に黑田勘解由孝高方より今日の合戰無用に成るへく通頻に申越るゝに付手を出さす翌日黑田方と仰談せられ敵城近く押寄廣家公城井谷に備を立給ふ左右は益田越中守元祥熊谷豐前守元直三澤攝津守爲虎三刀屋彈正久扶佐波越後守興連也城中よりも足輕を出し迫合ける處に城主宇津宮彌三郎降參の侘言申に付勘解分別せられて無事に相成たり

毛利輝元公藝州郡山の城を廣嶋に移るゝ事

一天正十七年二月廿二日御城地御見立として輝元公吉田を御出有て福嶋大和守か宅へ御下なされ巳斐豐後守福嶋大和守兩人を御供に召連られ明星山へ上り御城地を御見立成れける處に神領五ヶ村然るへき地なりと御意にて此地に御規定なされけり天正十七年四月十五日吉日に付て福島大和守に鍬初仰せ付られ則二宮信濃守就辰を召出され御城繩はりいたし御普請奉行相勤へくの旨仰渡され則信濃守御請申上聚樂の御城の繪圖を以て繩張せりかくて五ヶ村を廣嶋と改られたり是は御家の廣の字と福嶋の嶋の字を取ての儀也御城鍬初御普請初の日からの類は明星寺とて眞言宗の寺あり此住持に仰付られたり天正十九年に御本丸の御普請相調同年御入城なされたり此御城築さたる造用米銀仕出の儀は二宮才覺を以て八ヶ國の百姓町人等持合せの金銀十分一を御借用成れ三ヶ年に元利共に返濟有へくの通申觸たりさて又御家中の大小身ともに面々御軍役の時入せられける間知行高付出ける樣にと申觸たり百姓町人は

持合せの金銀有の儘に付出し其十分一を御用に立たり諸士中は近年打續き御軍役相勤不勝手もへ大方石高の付隱いたしたりされとも其付出の石辻を以て領知に押を入又は所替をさせ撿出の石辻悉く召上られたりされとも各御理もなし其撿出米を以て農家商家の借上の金銀滯りなく三ヶ年には皆濟仰付られたり偏に二宮才覺よき故なり

輝元公惣大將を奉り朝鮮御渡海の事

一關白秀吉公朝鮮御征伐に付文祿元年三月日本の惣勢渡海せしめたり其時輝元公御人數三萬騎吉川殿は五千餘騎にて御先手なり廣嶋御留守居は佐世石見守元嘉也小早川殿は筑前の國主たるに依て各別の御備にて其勢一萬騎相備には久留米の侍從秀包公千五百騎立花右近將監宗茂二千五百騎其弟高橋主膳增統筑紫上野助廣門其外輝元公よりの御加勢毛利七郎兵衛元康公都合一萬五千七百騎の御備なり輝元公は八列目の御備關白秀吉公の御名代宇喜多秀家の御備ともに九段の御備付也輝元公は釜山浦へ御着船其處に御陣を居られ其後朝鮮の都近き開寧と云處に御在陣成れたり朝鮮人山上りしける者とも有之に依て御手廻を以て在所〳〵へ下り居けるやうに仰付られ御下知に隨ひたる在所へは印の昇を御立させ人別に札を遣され隨はさる所へは御人數を差向られ退治仰付られたりうゐしもんうゐふんと云所の者隨身いたさす手强く働き味方の足輕共を五三度追立けるもへ宍戸備前守元續罷越れ退治有へくの通仰付られけるに付則元續相備の衆同道にて參り鄕人數多討果し獄門にかけ生捕百五十餘人張付に仰付られける故皆降參して下居たり又中渡りと云所に傳の城を御築せ野嶋三郎兵衛景親を籠置きける處